

684

124

アチックミュージアム
ノート 第十
土佐鯉魚業聞書
伊豆川淡吉著



0053473000

0053473-000

684-124

アチックミュージアムノート

アチックミュージアム・編

アチックミュージアム

第10

昭和11

AIA

101

124

68
12

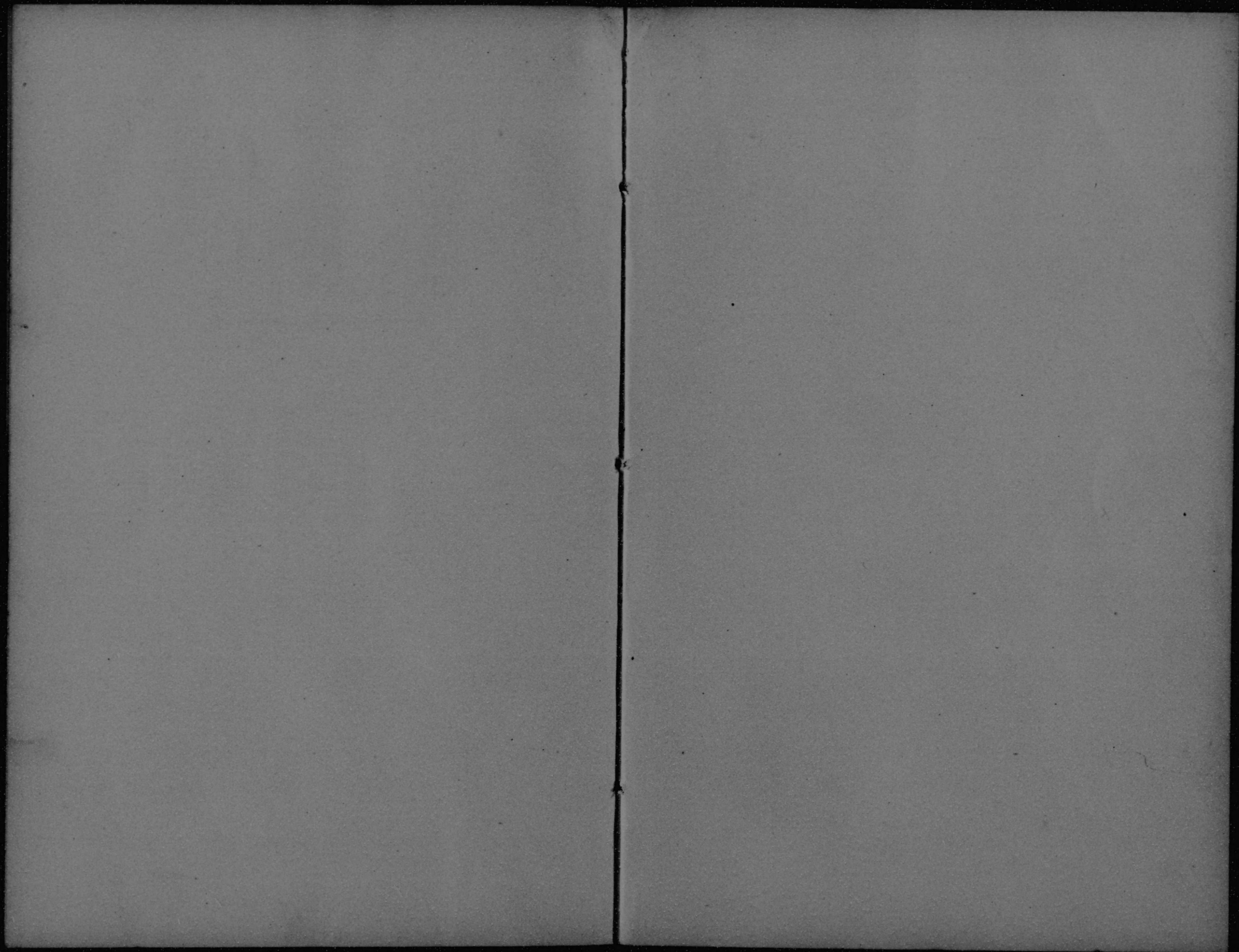
アチツク ミユーゼアム ノート第十

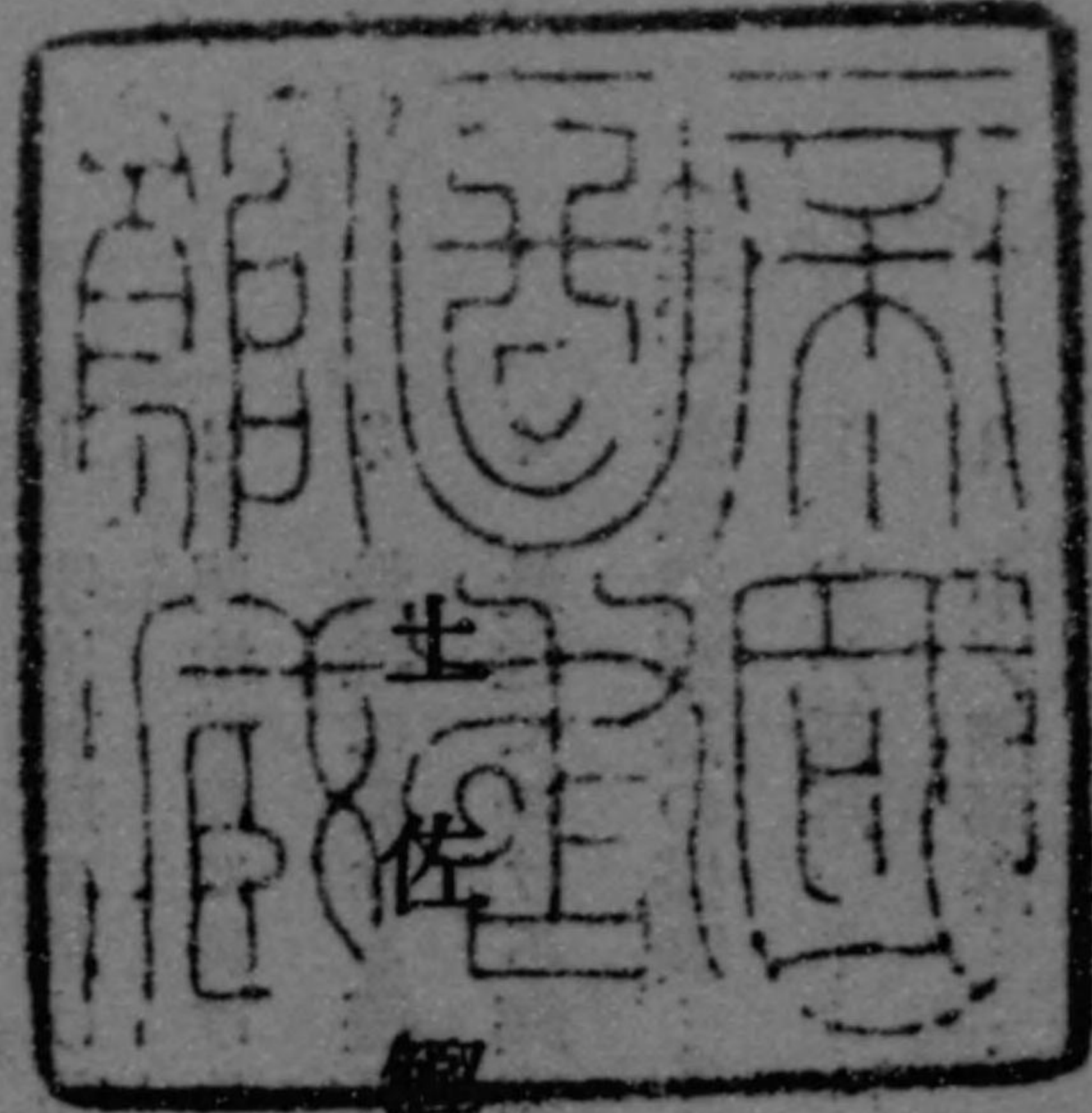
土佐鯉漁業聞書

伊豆川 淺吉

〔土佐漁村探訪旅行報告三〕

アチツク ミユーゼアム 刊





漁業聞書

「土豫漁村探訪旅行報告三」



目次

(一) 序言……………一

(二) 鯉漁業及び鯉節製造業の技術的變化……………一

 1 明治前期に於ける鯉漁業技術……………二

 2 明治前期に於ける鯉節製造技術……………九

 3 最近に於ける鯉及鯖漁業技術……………三

 4 最近に於ける鯉節製造技術……………七

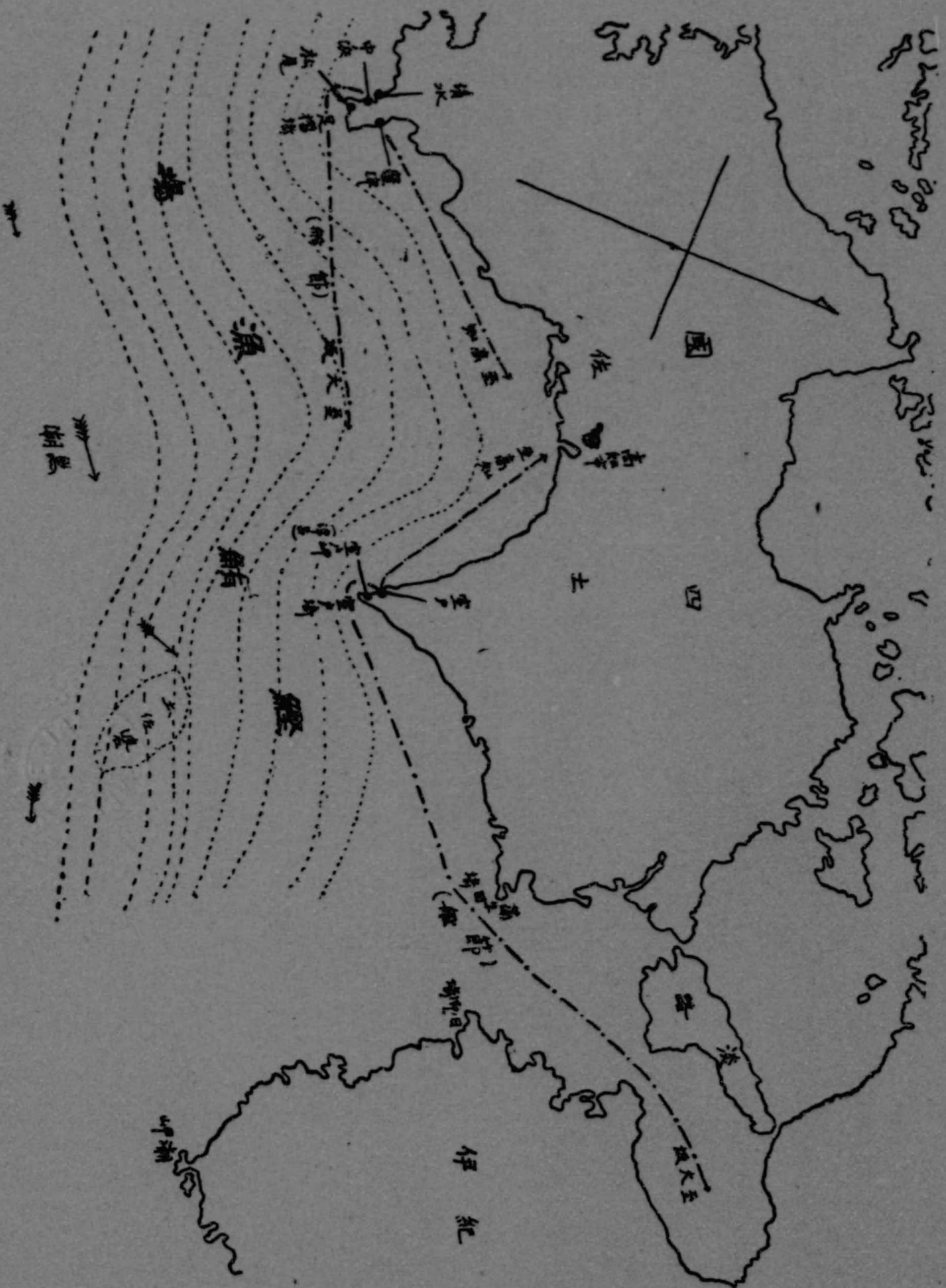
(三) 鯉漁業部落の盛衰……………一八

 1 室戸部落……………一八

 2 中ノ濱部落……………二六

 3 窪津部落……………三〇

(四) 總括……………三九



土佐沿海略圖

はしがき

去る四月、我々同人（櫻田、伊豆川）が約廿日間にわたつて、土佐及び伊豫の舊漁業を調査して歩いた。目指す所は土佐の舊捕鯨業の研究にあつたのである。がそれと共に、^{伊豫}土佐の舊鰯漁業及び^{土佐}伊豫の舊鯉漁業等に就ても多少の注意を拂ひ、夫々の土地に古老を尋ねて昔の話を聞いた。此の一編はその内の後者についての話を纏めたものである。纏めて行くに従ひ聞き落した點や、或は聞き違へた様な恐れある個所もあるかと思ふが、今はそのままに記述して置く。我々は差し當り、土佐捕鯨業の研究に主力を傾注しなければならぬ場合があるので、今の所それ以外の方面に心ゆく迄氣を配る餘裕がないのである。従つて此の一編は單なる備忘録に過ぎない。前記捕鯨業の研究が一應の纏りを見た曉には、又改めて、此の方面に力を竭し、以て土佐鯉漁業史の研究を成し遂げたいと思つてゐる。因に此の一編は伊豆川の手依つてなつたものであり、伊豫の鰯漁業や其他は櫻田の擔任によつて纏められてゐるから、併せて見られ度い。

一 序言

鯉漁業に於ける變遷も、これを縦に永く歴史的に見、横に廣く地理的に觀察して概括するならば、徐々に進歩の段階を辿つてゐる事は否定し難い。然し亦、各地方各部落に於ける斯業を個別的に仔細に點檢する時、其間自ら未だ特異の過程を承り得る事を見逃し得ない。早期に新技術と新經營法とを攝取して進境見るべき部落もあれば、或は遅々として舊態依然たる部落あり、更に甚しきに至つては往時鯉漁業の著名なる部落にてあり乍ら、進化の波に乗り後れで落伍したるが如き觀を呈してゐる部落さへある。かゝる現象は、今回我々が訪れた土佐一國に於ても、歴然として觀取し得られた所である。

我々が土佐に於て訪れた部落は、室戸、窪津、中ノ濱の三ヶ所であつた。此の内、中ノ濱は往時其隣部落松尾と共に、土佐前節（俗にハナマ）物の産地としてその名を唱はれてゐたにかゝはらず、今日に於ては全く昔時の面影なく、唯雑多なる沿岸漁業を營んでゐるに過ぎず。これに對し室戸部落は、今日鯉漁業と共に鮪延繩漁業を兼營する多角形的經營の遠洋漁船十數隻を有して、隆盛を極めてゐる。此の中間に於て、窪津は格別の變化もなく、依然として舊態を保つてゐる如く思はれる。されば、夫々の土地の人に就て斯業に關する種々なる話を聞くにしても、進歩の顯著なる室戸に於ては、往時のもののみならず最近の傾向についても併せ聞き得たし、中ノ濱に於ては稍詳細に古きものに接するを得た。

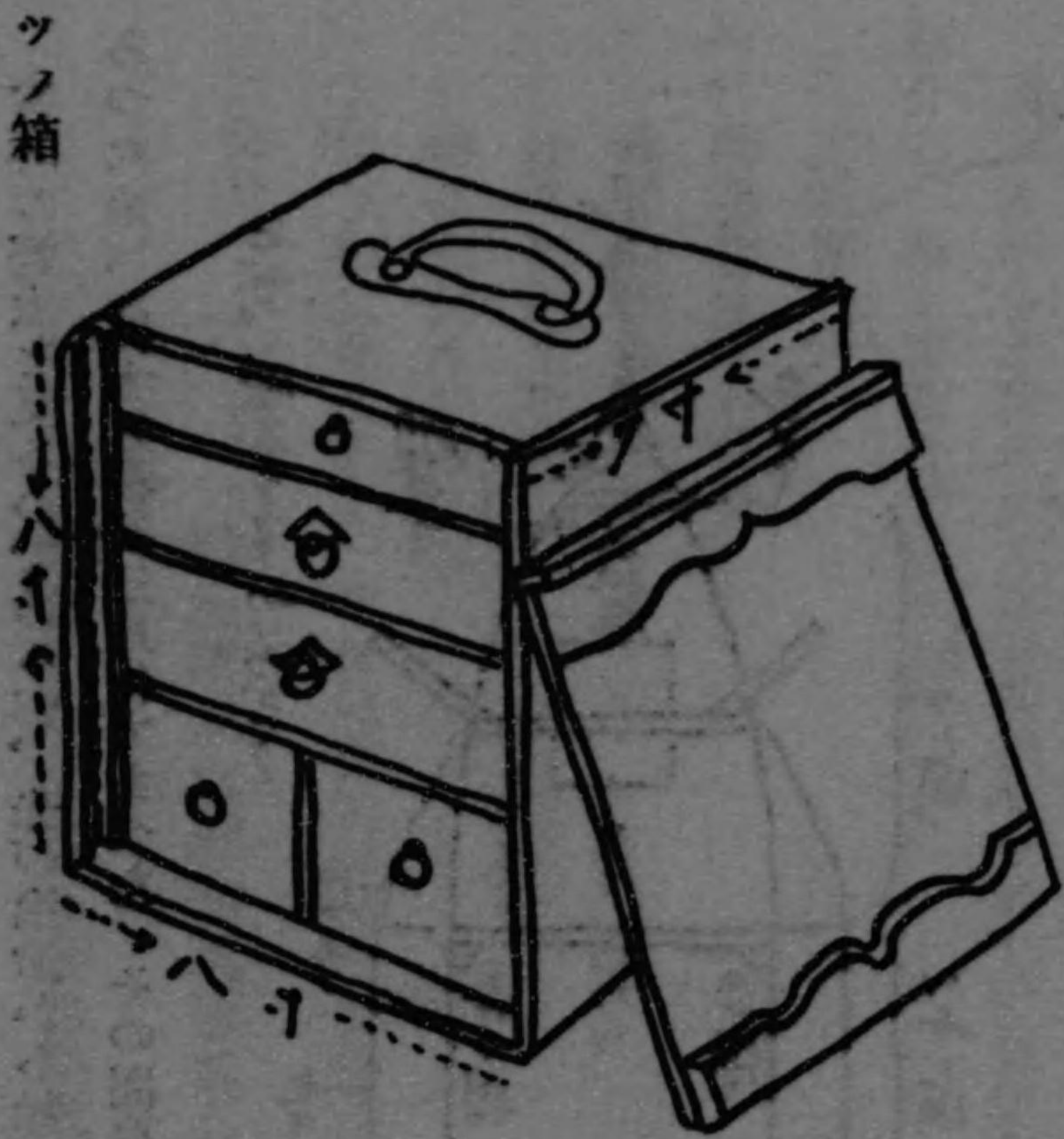
今此處に是等の話を整理し總括するに際しては、便宜の爲、技術的方面と經濟的方面とに分つ事とする。

先づ技術の點に就て見るならば、以上の三部落が歴史的には夫々變遷ありたりといへども、明治前期を通じて横に見る時には、三者の間に根本的には何等の差異をも認め得ない。後、明治末期に至り、動力機船の利用せらるゝに及んで三部落各々特異の方向に進み、途中、中ノ濱が落伍し、今日に於ては室戸のみが最高峯に立つて活

室戸では昔の漁船は瓦丈四尋半位であつて、これに生ヶ間が出来たのは明治廿年代であつたといふ。廿二・三人位乗船したらしい。

② 註 カンコ(生ヶ間)は船底の紐を抜いて水を漏し、又紐をしてその水の中に餌を生かして置くのである。船を引寄せた場合には紐を抜いて水を排出する。
ドウケとは口のせまい餌桶の事であつて、直径五尺位あつた。此の桶にエテカイ(餌の始末をする者)が始終水を汲み換えてゐた。

漁具は何れの部落に於ても竿釣具である。竿の長さは舊津では四尋位にして、中ノ濱では四尋半位あつた。此の先端に、これよりやゝ短い絹糸に餌釣を附したるものを結ぶ。これは一般乗組員の使用する漁具であるが、船頭



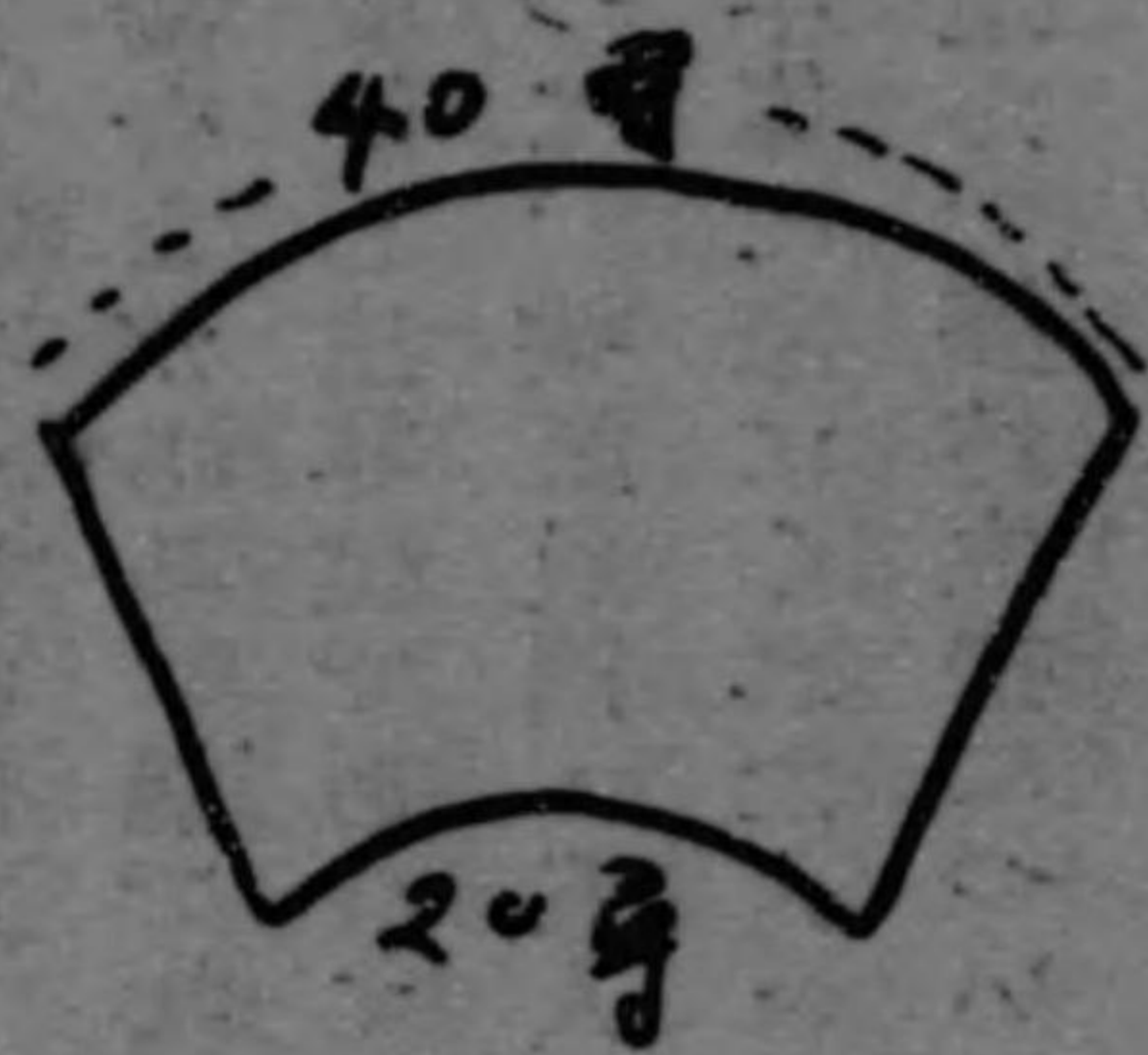
ツノ箱



② 擬餌釣

- イ、牛角
- ロ、石投皮
- ハ、釣 鈎
- ニ、鳥の羽骨

のみは擬餌釣(ツノ)を用ひた。擬餌釣の釣竿は、前者よりすつと小型である。それから此のツノを使用する者は、俗にツノ箱と稱する漁具箱を船へ持つて行く。昔は船頭とそれ以外の乗組員との區別が嚴重であつた爲、ツノは船頭でなければ使用出来ず、従つて船頭のみがツノ箱を持ち運びした。ツノ箱は船頭の印として、船主が船頭へ與へたものであるといふ。ツノとツノ箱との構造は圖の如し。以上の如き漁具の外に、乗組員は銘々カイベラを持つてゆく。カイベラは大竹を割つて杓子形になし、これに長さ一丈位の細い竹の柄を附けたものである。次に餌について述べよう。餌は鰯が主であつて、加之生きたまゝのものでなければならなかつた。此の爲、何れの部落に行つても、餌の調達は一苦勞であつた。此の餌を捕るのに、津津では鰹船乗組員が出漁前に働いた。餌捕りの指揮者を網張りといひ、使用する漁具をエテ取り網と云ふ。此の網の構造は上圖の如く扇形にして浮子



方四十尋沈子方二十尋。これを元船と、瓦丈十八尺位の小船との二隻で操縦する。明治十四・五年頃より廿年頃迄の間に、四つ張り網が使用され初めたので、其後は四つ張り網で餌取漁を行つた。尤も此の網が此の部落に入つて来る以前に、既に布崎邊には八田網の網代があり、其後も足摺崎沖、稻荷岬沖等で宇佐の漁夫が此の漁をなした。かゝる漁撈法が近所で行はれてゐた爲、八田網に近似したし四つ張り網が此の部落に採用されるに至つたものであらう。又張玉も使用した。張玉は船のとりかちから差したので、餌床の場合には一番船のとりかちへは、二番船が廻ることが

出来なかつたといふ。尙又、鮪大敷網(これは明治三十三年に初る)は舊六月中頃になると、餌取の邪魔になるを恐れて禁止されたといふ。中ノ濱の餌取漁は主としてウスバイ邊で行はれた。此の部落では鰹船は多く出漁して了ふので、別に人を二十人位雇つて、元船とは離れて四つ張りで漁撈したのである。餌取りの船頭を小船頭と云つた。又、外の部落から生籠を買つて餌とした事もあつた。即ち下の安瀆地宿毛邊へ買出しに行くのである。

此の場合には先づ買人が先に行き、取引が決定したといふ通知が来てから船がゆく。買人の役目は極めて六圖ケ敷ものであつて、生かしてある鰹が、それを若し策か何かで量つたならばどの位の分量になるかを見極めねばならぬ故、眼先の利く者を派遣したといふ。室戸では餌鰹は鰹船乗組の者が採つた。五月頃になると、附近の海に鰹の餌床場が澤山に出来る。尤も津呂部落でも鰹漁を行つた爲、その地先へ行つて漁を行ふ事は出来なかつたが吉良川の方へは行けた。吉良川では鰹漁業がなかつた爲である。漁法には攜て掬ふ場合と、四つ張り網などで採る場合とがある。攜て掬ふ漁をハマセと云ひ、掬ひとつた事をハマシタと云ふ。攜網の大きさは流れ五尋位、口の差渡し三尋位であつて、これに雌竿雄竿の二本の竿がついてゐる。雄竿の方が長くして五・六尋、共に槍製であつて、乗組員四・五人で漁撈する。尙此の張り玉を作る場合には、吉日を撰んで始めるのであつて、此の時には手傳に来てくれた人々を招いて本膳ごしらへで酒盛をするといふ。

進んで鰹釣漁撈について見よう。鰹船の中小型(何れの部落にもある)の方は大體乗組員が廿人前後から卅人近く迄であつたが、小型(窪津の小職)の方は十人位であつたといふ。然して窪津では、此等兩者の内その何れが概して優秀なる成績を挙げたるやは、當時断定し難かつた様である。今鰹釣の操作に入る前に、その労働組織に一瞥を與へて置かう。先づ最上位に位する者は船頭である。船主自身が船頭となる場合を直船頭と云ひ、然らずして雇人を以て船頭とする場合それを沖船頭といひ、陸上にゐる船主を居船頭と呼ぶ。船頭の下に乗組員がある。これを若し技能によつて分つならば、へのり、網張等は優秀なるものである。前者は漁撈技術が最優秀なるものであつて、後者は斯漁の重大な基礎をなしてゐる餌取漁の指揮者にして、且つ鰹釣も極めて功者である。乗組員中下位に位する者は八丁檣押し、次にミヅカイ、其下に炊がゐる。水カいは餌桶の水を換へて不斷に新鮮にして置くのを役目として、炊は食事萬端の支度をする者である。もしこれを逆に見て、年齢の順に登つてゆくとするならば、先づ小學校出位の子供が炊となり、それからミヅカイに進み、次に八丁檣押しとなつて一人前の漁夫

鰹

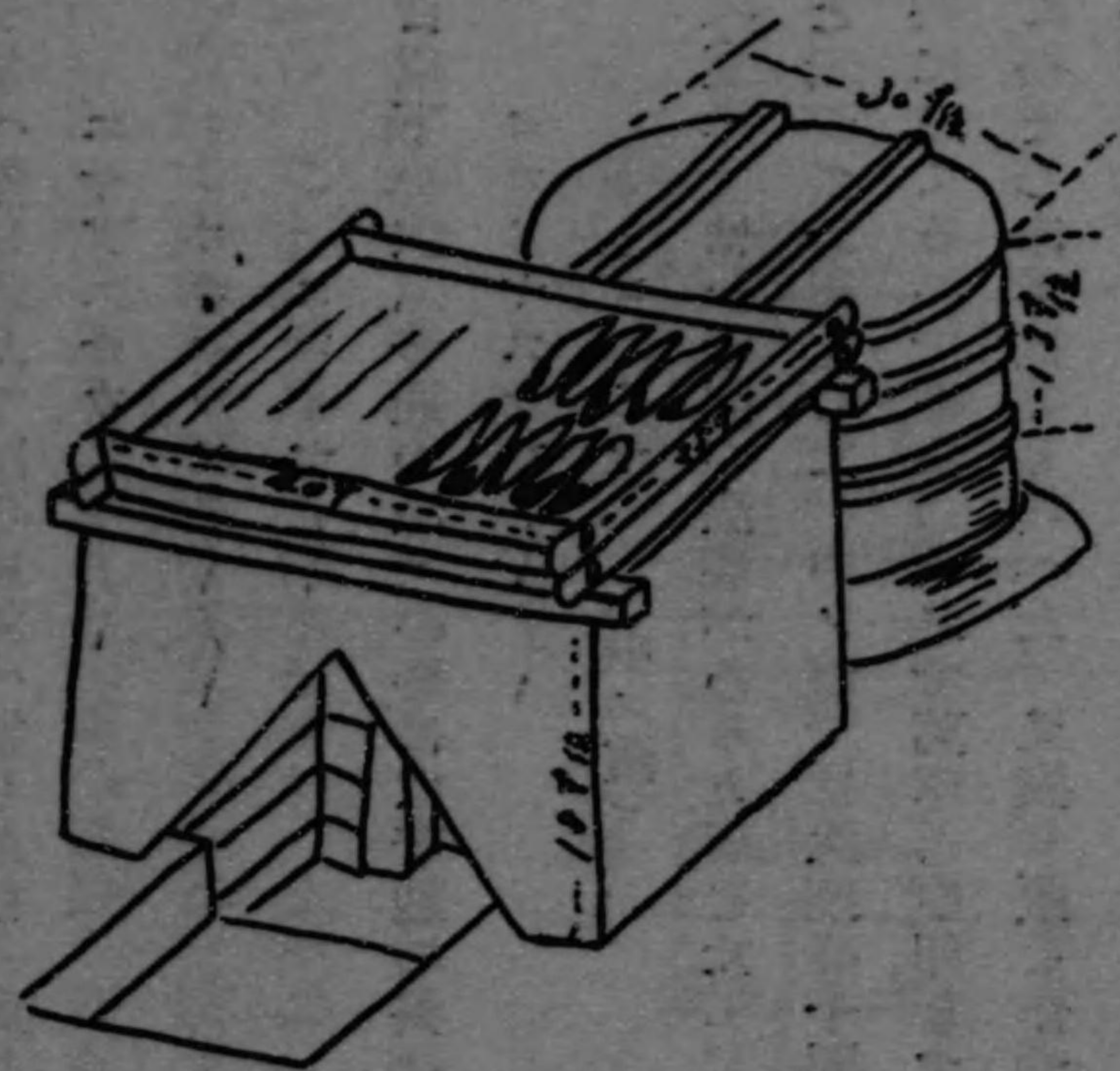
へ

あみ

となる(室戸)。中ノ濱では以上の外に奴^ヌノコといふのがゐたといふ。これは船には乗らず船主の家に來てゐる子供である。米を搗いたり、大桶に水を汲んだり、或は又薪を割つたりして、朝早くから濱に出て鰹船の出帆するのを手傳ふ。夕方、船の歸る時刻には又濱に出て船を待つ。船が來たならば水を運び、薪を運ぶ。又暇の時には船主の家の子守りをしたといふ。次に尙漁夫の服装(沖着)について一言して置かう。漁夫は赤禪をしめ、その上に腰巻類似のものをまよふ。木綿の紺色縦縞か蒼盤の模様のあるもので、その巾は一布半のものである。下襦袢も腰巻同様の布地で製した。この下襦袢の上にハンコドンザといふものを着た。アサギ色の縦縞のもので厚司仕立になつてをり、襟をつけて、羽織の如く前に紐を付しこれを結んでゐた。この紐は青芋のものに限られてゐた(中ノ濱)。さて漁撈をなすには先づ漁場を見定めなければならぬ。當時漁場として利用した海は餘り遠くはなかつた。凡そ、鰹は暖流の縁邊中に棲息する洄游魚であるから、四季を通じ暖流の消長に應じて北上し南下する。而して土佐は南國であり、不斷に暖流が岸を洗つてゐるから、鰹群は比較的海岸近く迄來襲し、中ノ濱の如きは以前は周年斯業を營んだといふ。が大體から云へば、鰹の漁期は三月から九月十月位迄であつて、此の期間が魚體の生長も節製造に適し(最適は四・五月であるといふ)、又尤も岸近くに寄つて來る時期である。例へば窪津の鰹漁についてその漁場を指摘するならばワイノウチの漁(上灘を北へゆく)と島の漁(六ノ島、タカトリ邊)とがあつた。前者に比し後者の方が遙かに遠方であつた。遠方へ行く場合には宵に窪津を出帆するのであるが、翌日の夕方には必ず歸つて來た。沖では決してとまる事はなかつたらしい。近くの漁に出る場合には、朝出がけに餌を沖でとるが、遠くへ行く時には餌をとつて一度部落へ戻つて來、又適當の時刻に出漁するのである。

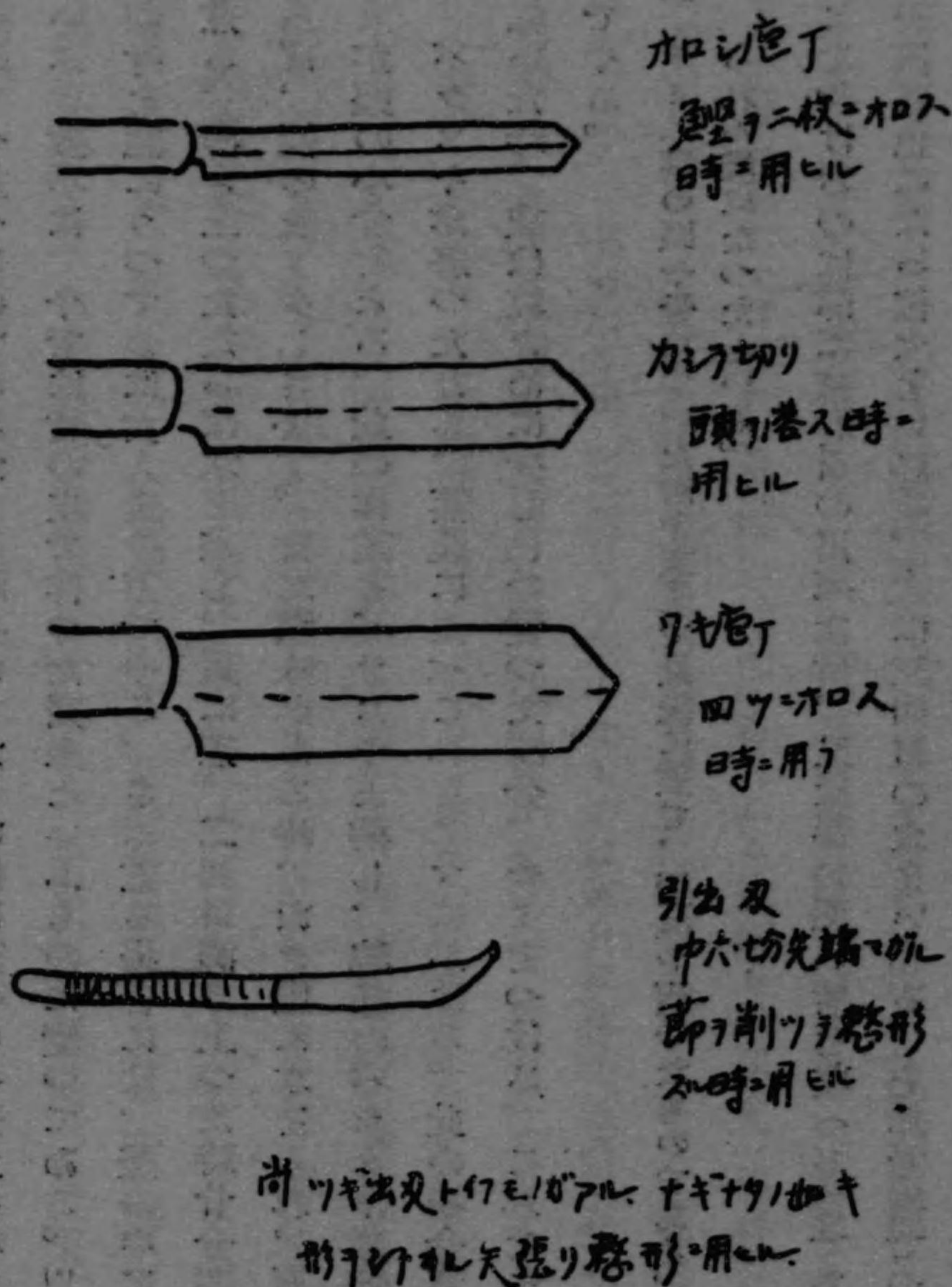
餌も充分とり仕込も濟み人も揃つた。さあ漁に出よう。此の漁には東じらみ(朝まづめ)もまじめ(夕まづめ)も大して影響はない。鰹群がどの邊に多く洄游して來てゐるかは船頭が多年の経験で推知し、又友船の漁況を見聞して胸に疊んでゐる。帆は追風をはらんだ。船頭は梶棒を握つて艫に坐り、船は目指す方向へ走つてゐる。へ

節製造場の構造から述べよう。製造場は釜納屋と云つて、昔から草葺屋根の二階建てでなければ良い節は出来ぬとされてゐる。二階は床が竹の簀になつてゐて、屋根には窓が明いてゐる。二階は主として節を乾燥せしむる場所として用ひられるのである。階下は、煮釜と切しなし(鯉を節の形に切る)をする流し場にて占められてゐる。煮釜はその大き徑二尺八寸—三尺のものであり、その形は普通の釜と變りはない。これは土を掘つて造つた甕に据えつけられる。釜の附屬品はコシキと煮かごである。コシキは釜の腰にはめるものであつて、その役目は釜の容積を大ならしめ、煮沸の際湯の溢出を防ぐにある。高さ一尺二・三寸。煮かごは丁度釜の中に入る位の大きさで竹製の丸かごである。鯉の切身を此の中に並べて、數枚重ねて釜の中で煮る。甕の前にはアマが造られてゐる。



高さ一尺七寸—一尺八寸、土製である。此の上に蒸籠を重ね、その中に煮た切身を列べると、甕の口から出る火氣によつて節の水分が除かれるのである。蒸籠は周圍板にして中が竹製のものであつて、四尺と二尺五寸位の大きさである。其外種々なる桶鹽類がある。その内ぬき鹽は經三尺四・五寸位の大きさ。庖丁にはオロシ庖丁、カシラ切り、ワキ庖丁があり、その形圖の如くである。節の整形にはツギ出双、引出双等が用ひられる。其外まないた等々が必要である。小屋の大きさは流し場や釜數等によつて異なる。大きい小屋で釜數が三枚位であつた。その小屋の廣さは十三・四坪位であらうといふ。尙又、小屋の前には節を日乾する爲の廣場がなければならぬ。

節の製造工程に入る前に、先づ製造組織を見て置かう。釜納屋



の主任を納屋番といふ。この言葉は何れの部落に行つても使用されてゐた。納屋番は納屋所有者に雇はれてゐるものである。窪津では納屋番の下に男人夫が七人から十人位居り、それ以外に女人夫も多少雇つたといふ。人夫の名稱や何かは、當時屈指の鯉節の産地であつた中ノ濱で聞いた所が最も詳細であつたから、此處にはそれを記さう。節納屋に不斷にゐる者は納屋番であつて、これは鯉船一艘につき四人位であつた。四人の内最上

に位する者が本納屋番であつて、これに次ぐものがイケ(相手)納屋番、それから十六・七才の奴が一人と、それに臨時の者が一人走り使として雇はれてゐた。本納屋番は沖船頭に匹敵する丈の格があつた。納屋番の外に常節作りといふのが、漁期中七ヶ月間位日雇で七・八人雇はれた。これは日雇であるから仕事のある日丈け納屋に出る。普通にこれをシチクリと呼ぶ。シチクリには頭がゐて、休憩や就業はこれが一々指圖する。以上の外に、婦人が部落全體として三・四十人程、バラ抜きに雇はれた。愛媛縣の方から團體で来て、五・六人宛一團と

なつて民家に宿をとつたといふ。勿論節製造の季節中丈けである。

さてこれから節製造の工程を述べよう。鯉を買ふとそれを納屋番が持つて歸り、先づ鯉の目當りをして、それから鯉の頭を落す。今は五百目以下の鯉は龜節にして丁ふが、以前は四百目位迄本節に作つたといふ。頭を落してから腹を割き、中骨から兩側の身をはいで、本節ならば四つ身におろす。この作業を切りじなしといふ。此の作業に用ふる主要な道具は、カシラキリ、オロシ庖丁、ワキ庖丁の三種である。切りじなしをした鯉身は、これを煮籠の中へ並べるのであるが、其時身のまがらぬ様に籠の中へ茅萱の枯れたものを豫め敷いて置く。これを敷草といふ。敷草は、今では竹の皮で作つた圓座といふものに變つてゐる。以上の切じなしは納屋番の仕事であるが、切身を籠にうつすのは女人夫の方でやる。さて煮る場合には、釜の中に煮籠を敷重ねて一度スゝと沸き上る迄煮る。沸き上つたならば水を差し、更に煮、二回目沸き上つた時廿分間位つゞけて煮る。そして釜から出したならば、籠のまゝ少しさます。まだ温味がある時、ぬき鹽に水を入れ、籠のまゝひたす。それからバラヌキなる婦人が鯉の小骨をとる。此の作業をバラヌキと稱し、龜節のバラヌキは特に面倒にして六ヶしいものとされてゐる。バラヌキが終つたならば、蒸籠に並べこれをアマにかける。此の場合蒸籠は四・五枚重ねる。アマにかけた肉が乾いた時、或は乾きめに少し色の變つた時分、モミをつける。これをモミをそぐふといつて、人夫七人―十人位でやる。

註 モミは鯉の頭や骨についた肉を煮釜で最後に煮て、糟鉢で搾つたものである。はらば(はらも)の肉は近頃モミに用ひられる様になつたといふ。

モミを付けるのは節に破れ目の出來た所、又は形の悪い所を整へる爲である。モミをつけたら再びアマにかける。一回狐色になる位火をいれる。次に三回目の火をいれる。それで指でついても節がこはれぬ程度に固まつた時、節を納屋の二階に入れる。二階は床が簀になつてゐて、下から火氣が上つてゆくの節が自ら乾燥する。漁

事の多い場合には、階下で節を造る火氣を利用し得るが、然らざる時は熊々火をたかねばならぬ。従つてかゝる場合には、製造業者には利害の關係が大きく影響するといふ。二階の温度は華氏百度位に上る故、此處で節の手がへしをする事は可成り困難であり、これは納屋番の役目である。これを二階をするといふ。二階で充分乾燥させたものを下におろす。これを黒節といふ。これから節削りになる。現在では女子でもこれを行ふが、昔は男ばかりがやつた。即ち男人夫の仕事である。節を削るには草を刈り取つて置いて、これに濕を與へて夜分節をこの草に包んで置く。翌日取り出して削り、削つたものは天日に乾す。天氣悪しき時はアマでさつと油のよはる迄乾かす。節削りにはツギ出刃と引出刃との二種の庖丁を使ふ。前者はナギナタの如き形にして、後者は巾五―七分位の小刀の形であつて、その先端が曲つてある。腹部の凹みなどはそれで搔くのであるが、腕のある人は引出刃は使用しないといふ。さて日光で二日ばかり乾かし、乾いたものに微付をなす。微付をなす迄には、生身一貫目のものが平均二百四・五十目位に迄乾燥したものでなければならぬ。微は室に入れて蒸して置くと自然につく。微が付いたものを又日光に當てる。完全に節に仕上つてじょうがれになると、生身の二割の重さになるといふ。尙節削りをした場合削つたかすを節屑といふ。これは食料にもなるが、澤山ある場合には肥料にもする。又黒節のまゝ長く放置すると、皮の間に微が自然につく。かびが付いた節の屑は不味から肥料にするといふ(節製造の話は窪津)。

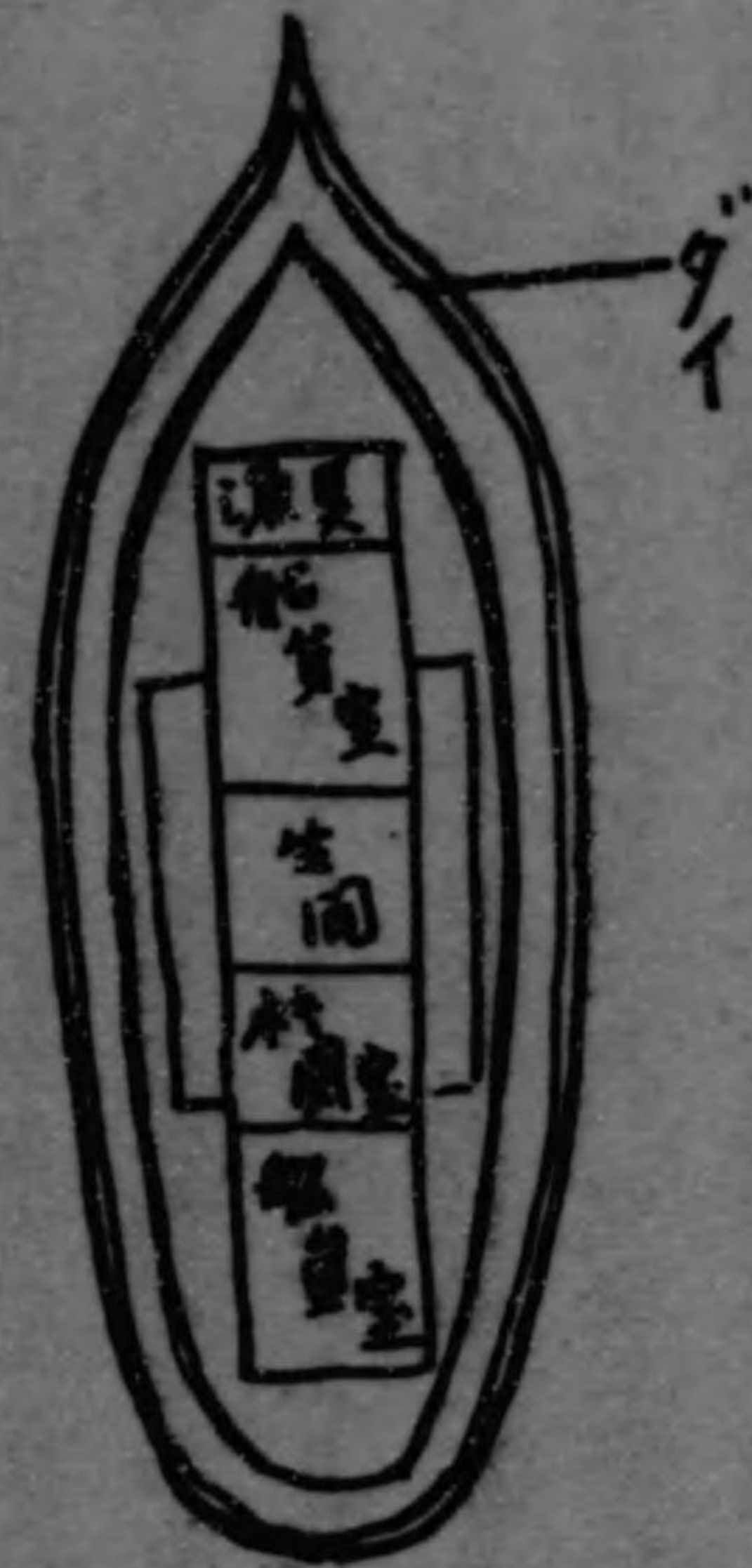
3. 最近に於ける鯉及鮭漁業技術

今日の鯉釣の技術は既に周知の事と思ふから簡略に述べよう。先づ以前の方法と根本的に異なる所は、漁船が動力付となり、船型が擴大した點にある。動力漁船が利用され出したのは、明治四十三・四年であるといふ(清水)然し當時は十一廿噸位の船型であつたので、到底遠洋へは出漁せず、近海で漁撈するに止まつてゐた。室戸邊で

も然うであつたといふ。現在窪津では、尙かゝる小型動力船のみを使用してゐる。その一例を示すと

噸數 十一、五三 馬力 十五
乗組 船長一人 機關士一人 船員十四人

それが次第に擴大され、大正十年の聲を聞くと四十噸級の漁船が建造された。かゝる大型船の乗組人員は、船長機關士を初め三十人から四十人位である。尤もかゝる漁船は、我々が調査した三部落の内では、室戸にのみ行はれてゐた。さてかくの如き漁船にあつては、その漁撈も近海にのみ止らず、遠く外洋に出て魚群の跡を不斷に追求してゆく。従つて利用する漁場の範圍としては、南は鹿兒島沖から、東は三浦半島の三崎を中心として活躍し



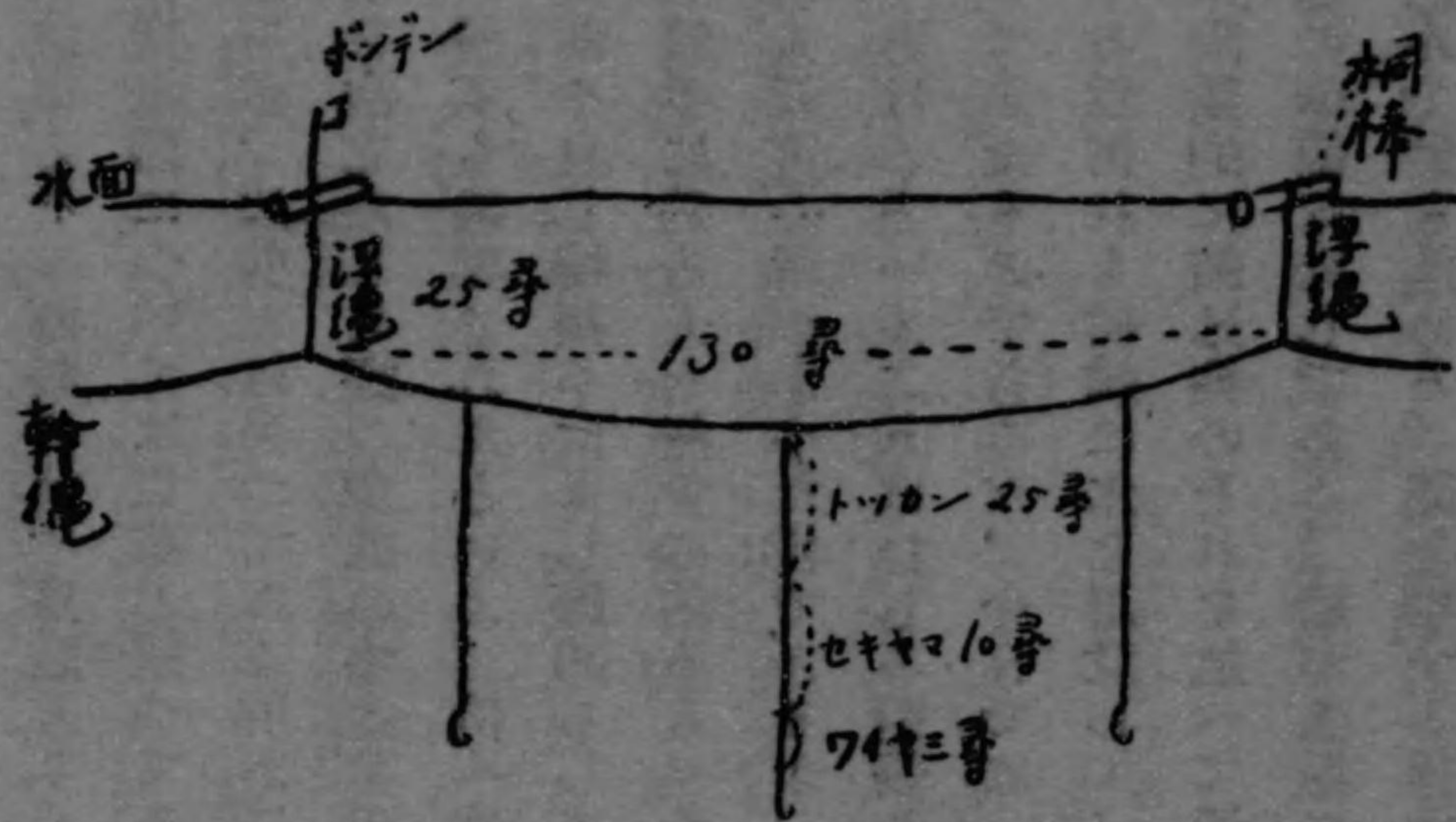
時には夏を越ゆれば北海道近海に迄及ぶ事があるといふ。漁場の範圍かくの如く擴大してゐる故に、漁撈も必しも輕釣一點張りではなく、鮪や、トンボ等の釣漁をも兼ね營むに至り、その經營方法が極めて多角形的になつてゐる。例へば、土佐近海では鯉漁は三月より九月末迄位である。が此の漁期が終ると約一・二ヶ月おいて、十一月末頃からトンボ延縄が始まり、これが三

月初旬迄続く。それより、三月十五日過ぎから五月十日頃迄鮪延縄漁を行ふ。遠洋漁業である。尤も漁期の重復してゐる場合には、その年々によつて漁獲の多さうな方へ轉ずる様である。かうして周年を通じて見ると、休漁期は鯉漁期が終つてからの一・二ヶ月に過ぎないのであつて、此の期間に船體の修繕や、漁具の入れ換へ等をなす。それ以外の期間は、ほとんど魚群の跡を追求して不斷に漁撈を營んでゐるのである。さてかゝる漁船に於ては、船型大抵西洋型を取り入れてゐる。清水港で、我々は在來の和船の大型のものに動力を据え付けたものを一・二瞥見したが、然し大部分は西洋型か、その類似である。此の型の漁船は、何處の漁港に行つてもこれと似たり寄つ

たりのものを容易に見出し得る。蓋し在來の和船は、安定度少にして構造概して脆弱の爲、航走には便なれども他の一面轉覆破壊の恐れが多い。従つて遠洋漁船の如く、不斷に洋上で日を暮すものには適してゐるとは云ひ難

い。西洋型漁船はこれに對し、構造頑丈にして安定度大なる故、遠洋漁船としてはむしろ此の方が選ばれるに至る以所である。その大體の間取りは圖の如く總甲板にして、又生間が復活してゐる。食料、燃料、飲料水、氷等は、兩脇に設けた夫々の船艙の中に入れる。

次に漁具について述べよう。これは昔と大差はない。但しツノを用ふる者が多くなつた。昔はツノは船頭のみが持つたが、今日ではかゝる區別はないといふ。又現在では、擬餌釣にシベキ、チツチと稱する物を使用してゐるといふ。それから、昔はヘラ竹を持つて行つたが今日ではそれを使用せず、船中に撒水ポンプを備へつけ、それによつて海水を沸かす。以上は鯉漁具についてであるが、其外、鮪とトンボの延縄を所有してゐる。何れも浮延縄であつて、綿糸を以つて作るものが多い。一鉢の大きさ、トンボ延縄は幹繩二百二十尋(一尋に付六匁)、浮繩廿三尋、釣十本、鮪延縄の方は幹繩百三十尋(一尋九匁)に浮繩廿五尋、釣数は前者より少い。一艘で所有する鉢数は百五十鉢位である。尙、トンボは晩春及初夏に至れば、海表面の水温が上昇する爲水面に浮ぶ。此の時には、鯉漁と同様生鱈と擬餌釣とを以つて釣りあ



餌料は鯉のそれは生鯉であつて以前と變りはない。が然し、今日では以前の如く乗組員が出漁前に捕獲するといふ事はなく、總て買餌である。鮪漁の餌は主として鳥賊である。勿論これも買餌である。従つて今日に於ては鯉鮪漁業とその餌料の鯉や鳥賊との漁業とは完全に分離してゐて、後者は沿岸漁業者がこれを司つてゐる。

漁撈組織については以前と變つてゐない様である。唯漁撈技術について見るに鯉漁に於ては枝葉の點に就ては、はあるが、以前とは異つてゐる所が二、三ある。先づ今日では、ヘラ竹の代りに撒水ポンプを以て雨を降らし、海水を泡立たしめ鯉の食欲の増進を促す。それから釣獲の技術について見るに、以前にはその功拙と同時に其所作の優劣も論難されたといふ。例へば誰某は中々釣れるが所作が悪いなどといふ。室津の俚諺に

男前おとこや良し構掛りはよし鯉釣らして振りよ見たい

即ち派手に釣る人と無骨に釣る人、大鯉が得手の人と小鯉が得意の人、又釣り場所に得手不得等もあつて、多分に名人氣質の所があつた様であるが、今日に於ては振りなどは如何でも一向かまはず、又非難する人もなく、唯釣りあげるといふよりはむしろ引張り込み主義に變つて来たといふ。又以前の漁は、朝出帆しては夕方には必ず歸つて来たものであるが、今日では一航海一週間か十日位かゝる。それ故、其の期間中釣り擧げた鯉を船中へ保存する爲何れも船艙に氷を用意して、その鮮度を損ぜざらん事に努めてゐる。鯉釣の技術は以上の程度に止め、次に附隨的に鮪延繩のそれを述べて置かう。此の漁業も一航海十日間位を要する。鯉漁の場合と漁具は異なるが、其他の準備は同じである。船が漁場に來たならば、天候潮流を見定め、鉢数を適度に考慮し、又繩を延ばす方向を選んで船を進める。繩を投ずる操作は、主として三人にて左舷（胴の間邊）に於てなす。一人が繩を投ずる役をなし、他の一人が餌を附し、別の一人が桐棒やボンデンを付ける。その順序は、先づ一鉢をとり出し、其繩の一端に浮標とボンデンを結付し、これを海中に投ずると、一方には鉤に装餌し、他方には浮繩に桐棒やボンデンを結付し、船の進行に従つて繩を投じ、一鉢終れば次の鉢の繩をこれに接続して投ずる。かくして豫定の鉢数を

投じ終つたならば、幹繩の適宜の所に手繩（トツタリ繩）を結付して、その端を船に止めて繩との連絡を保ちつゝ、船をこゝに停止する。而して左右のボンデンに注目しつゝ、若しボンデンが沈下したならば魚がかゝつたのであるから、幹繩を繰り越しつゝ、魚體に近附いて、機會を計つてこれを船中に繰り入れる、魚のかゝりがよく甲板が忙しくなれば、船員總動員して働く。鮪延繩に於ては、投繩は主として三人で行ふのであつて、他は助手である。従つて鯉釣の如く各自が名々釣竿を持つものではないから、一般に鯉漁の時程の人数は必要としない。

4. 最近に於ける鯉節製造技術

鯉節製造業は、今日に於ては、鯉漁業とは別個の経営主體の下に營まれてゐるものが多い。所謂水産製造業の一部分として、漁業者よりはむしろ海には直接關係の少ない魚商人によつて多く經營されてゐる。従つて今日の鯉漁業を論ずるに際しては、節製造に迄立ち入らなければならぬといふ譯はない。然し今日の節製造技術を簡單にでも知つて置く事は、會て同一経営主體の下にあつた鯉漁と、その節製造とが自ら分離してゆく過程を知る上に於て、或は幾分の助けになるかとも思ふ故、極めて簡略に製造技術を見よう。

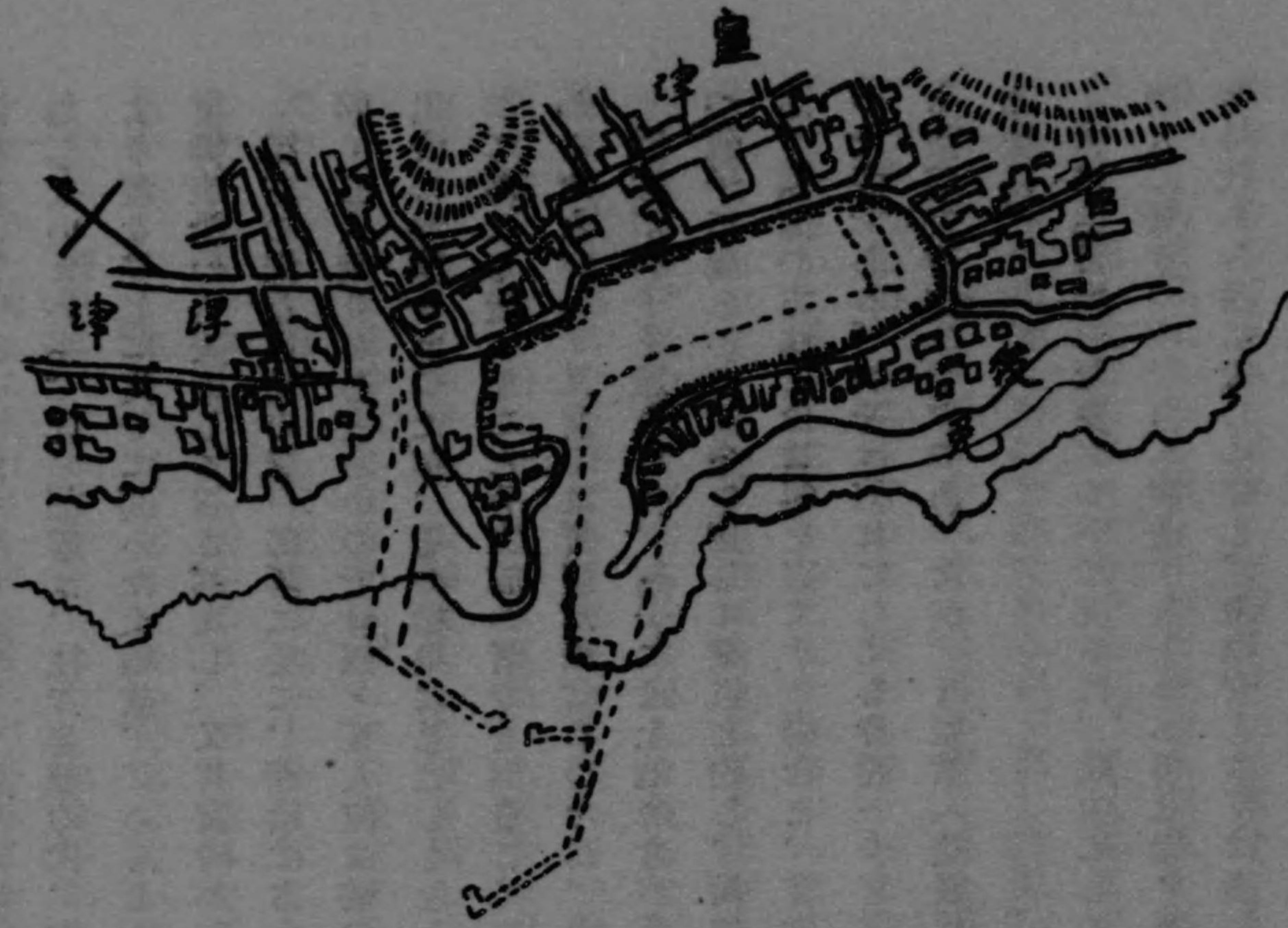
今日の製造技術と云つても根本に於ては以前のもものと變りはない。我々が訪れた三部落の内では、未だ動力等を使用して鯉節を大規模に製造してゐる機械工場式のものを見當らなかつた。従つて大量生産は行はれて居らず、未だ従來の如き小規模の工場手工業的形態のものである。が同じく工場手工業的形態のものであつても、以前のもとの今日のものとは多少の差異がある。第一に目立つ所は、以前の釜納屋は藁葺きの二階建にして、階下に煮釜があり、階上が乾燥場になつてゐたのであつたが、今日では釜場と乾燥場が分離して別棟になつてゐる事である。即ち、以前の様な建て方であると、階下に於ける煮釜の水蒸氣が上昇して二階の湿度を大ならしめ、その爲却つて節の乾燥を妨げる恐れがある。此の様な理由から、今日では乾燥室を釜納屋から分離したのである。さ

て釜納屋の廣さなどは以前とは餘り變りはなく、普通の納屋では釜数は二つか多くて三つ位である。唯此の釜の形は、以前には丸釜であつたが今日では鐵製の角釜を使用する者が多い。此の角釜の方が沸騰が早いのと、煮籠を數多く入れ得る便利があるからである。又煮籠は釜の形に應じて角型になつてゐる。即ちその構造は、板で四角な箱を造り、底部のみを竹の網目で張つたものである。此の籠の方が、以前のものより價格安くして重量軽く又煮の中に數多く入れ得るから今では多く使用されてゐるといふ。それから乾燥室であるが、この構造には色々あること勿論である。が一般には地面を掘り下げて焚口を底に設け、竈の上に鐵板を渡して節が直火に當らぬ様になし、鐵板の周圍の壁に幾段にも棧が渡してあり、その棧に蒸籠を幾重にも掛ける仕組になつてゐる。例へば塔の様な構造である。竈は、乾燥室も釜納屋も、何れも煉瓦かコンクリートで固めてある。以上が、設備の上に於ける以前と今日との差異の主なるものであつて、これ以外は餘り變らぬ。次に製造工程について見るに、切りじなしからアマにかける所迄は以前と同様であるが、モミをそくふ所が稍異つてゐる。即ち以前はソクイは、骨付の肉を煮て摺つたものでなしたが、此の方法では乾燥するとそくいした箇所が脱落し易いのである。それで近頃では、煮たる骨付肉或ははらば(腹部の肉)に、生肉を等分に混合して摺つたものを以つてそくいし、更に一回煮上げをする。かうする時は、乾燥後もそくい肉の脱落することがないといふ。それ以外は以前の方法と餘り違はない様である。之を要するに節の製造技術は、以前に比し可成りの進歩は認め得らるゝにしても、結局未だ工場手工業の域を脱し得てはゐない。節の商品としての性質が多く然らしむる所でもあらうか。

(三六) 鯉漁業部落の盛衰

1. 室戸部落

室戸町は、明治二十二年自治制施行に當り、室津領家浮津元四ヶ村を合併して室戸村と改稱し、同四十三年一



(るよに覽要勢町戸室)

月町制を施行した。その内漁業關係の部落は、浮津及室津であつて、又此の二部落は、地域的に見ても室戸港を中心にして町の市街部分をなしてゐる。従つて室戸町の漁業の推移を見んとするならば、此の市街地をなす部分に中心を置いて見るべきであらう。

以前には此の市街地部分には、雜貨店七軒位(米も賣る)、酒屋四軒位(其内造り酒屋二軒)、質屋六軒位、料理屋二・三軒があり、他の一般民家は、農業を片手間に營む漁家がほとんど全部であつた。然し單に漁家と云つても、總てが一樣な色合のものではなく、各舊部落の有した特色に従つて、尙當時浮津及室津には特有の色合が存した様である。捕鯨組が活躍してゐた時分(捕鯨組は明治三十八九年頃迄)に於て、主として捕鯨漁夫に雇はれたのは浮津部落の漁夫であつた。これに對し、室津の方は主として釣漁業を營んでゐた部落であつたらしい。即ち前者は、冬期は鯨漁夫として働き夏場は鯉漁夫に轉じたのであるが、後者は夏期鯉漁に従事した事云ふ迄もなく、冬期も亦メジカ釣や何やかやの釣漁に出た者が多かつた様である。云はゞ、後者は四季を通じて色々な釣

漁を主として行つてゐた様である。又港の南端に後免といふ部落がある。其戸数は以前から五六十戸で、餘り増加しないといふ。此の部落は、往昔藩制時代、吉良川方面の住民の二、三男が移住して來たものであつて、上司より税を免じて貰つて開いた土地故、ごめんといふ地名が出來たのであるといふ。此の部落の男子は藩制時代屢屢御座船の水夫として召されたし、又其當時から五十集や廻船の水夫として、最も多く乗り組んだのである。

扱右の様な以前の室戸部落に於て、鯉船は古くから十二三隻であつたといふ。此處の鯉船では、小さいのは十四・五人乗りから大きいので廿四・五人位は乗つた。船を仕込む場合、その資本は大抵自己資本であつた。共同出資の形態もあつたが、その結果は思はしくなかつたといふ。それは、初めは本家筋の者が漁撈上の指揮權を握つてゐても後になると分家筋の者でも出資してゐる關係から權利を主張して、意見の衝突を來す事が屢々あつたからだといふ。又當時は質屋が相當あつた爲、漁家はよくこれを利用したといふ話である。

船主が舸子を雇う場合、舸子には土地の者が多く、又兩者の間には多少の主従關係は存在してゐた。船主は先づ舸子に幾らかの前金を貸して乗組を約し、尙細かい役割（へのりとか網船頭とか）の割宛は酒盛の時行ふといふ。雇傭の方法には賃銀を以てする場合と、當皆（代分け）制度にするものがあつたが、當皆制度の方が多かつた様である。舸子は何れにしても身體一つを以て乗り組んだ。が沖中で飯を食ふ場合、當皆の方の船では飯櫃と茶碗で皆食ひつきであつたが、日雇船（賃銀雇の方の船）ではモツソを持つて行つて、炊がこれに盛り分けたといふ。

次に漁獲物の販賣について見るに、船主にして節製造者も多少はゐたらしいが、然し大概の船主は漁獲物を魚商人に賣りつけ、自ら製造するといふ事は餘り無かつた。漁獲物を船主は皆魚市場の流場に揚げた。魚市場は舊藩時代から港に接して存し、漁物賣人は昔は藩から任命されたものであつて、これを御問屋と云つた。御問屋は徴税の任務もあつた。御用鯉は昔は百本に付四本を納めたといふ。明治末期に於ては縣町税、水産組合費、漁物

取扱人給等合計して水揚の七分位を差し引かれた。此の魚市場に出入する魚商人は、藩制時代の様に商人札を所持してゐて、五人一組毎に連帯の責任を負ひ、各組が結局に於て又全體的に責任を負ふのである。此の制度は、恐らく舊藩時代から存続して來た鯉商人制度を眞似たのであらうといふ。此の制度の故、魚市場に對し代金を不納にする商人は生じないさうである。商人札は商人のみでなく鯉船の船主も所持してゐた。従つて船主も節製造をなす事が出来るのは勿論であるが、然し實際には既に述べた様に、大概の船主は鯉を市場で商人（船をもたぬ）に賣つて了つた。因に昔は商人は御用鯉を藩へ納めたといふ。扱船主から鯉を買つた商人はそれを如何するか。節に製造したり或は生鮮のまま、輸送したりしたのであるが、勿論前者の方が多かつた事は云ふ迄もない。商人は節を製造した場合には、それを五十集につんで大阪神戸方面へ送つた。鯉組の活躍してゐた時分には、鯉五十集が積んで行つたといふ。鯉漁は主として冬期行ふ故、その五十集は夏期暇になるから、此の暇を利用して積んだのであらう。此の場合鯉商人が鯉商人を兼ねてゐたのではないかと思ふが、その點は聞き漏らした。兵庫方面に向ふ節船は年に十隻位であつたが、大阪へ行つた節船の方が數の上では遙に多かつたといふ。五十集には船員が四名乗り、此の内の一人は商店直屬の上乗船頭であつて、これが一切の商取引をしたのである。五十集は歸路には下り荷として雜貨等を阪神地方から買ひ積んで來た。鯉は當時大部分は節に製造した様であるが、然し又生鮮のまま、輸送も多少はしたといふ。これを輸送する者をナマシと稱した。十四・五石の船を以て高知の市場へ運んだのである。船數が五隻位あつたらしい。又二・三十石の船でシビ等を積んで、紀州出島や和歌山、大阪等に行つた生船もあつた。此の場合には、細い籠にシビを入れて積んだのであるが、途中腐敗さしてしまつた事もあるといふ。五十集人夫は、多くは此の部落で古い傳統を有する後免の人々である。

最後に鯉船に於ける分配を見よう。魚市場から手取して來た水揚高（或は漁獲物）から三分を天引して、これを菜の魚と稱して乗組員一同が貰ひ、平等に分配した。菜の魚の外に舸子が貰ふものは、賃銀制に於ては乗組の

際にきめた固定給である。これは大漁不漁に關係なく一ヶ月廿八圓位が平均であつて、船乗りが卅五圓位、炊は十八圓位であるといふ。此の程度の賃銀額は餘り古い頃のものではあるまいと思はれる。賃銀制度に於ては、漁業から生ずる損益は原則として船主が負擔するのである。賃銀制度の外に當皆といふ分配法がある。此の方法では、舸子が勞働を船主が生産資本を共に持ちよつて漁を行ひ、純益を豫め定めた割合に於て船主と舸子との間に分配する。所謂代分け制度である。此の制度の詳細は遺憾乍ら聞きもした。然し今日小船の場合の船の當りが四分五厘、又大型鯉船の當りが五分五厘であるから、當時の鯉船の當りは恐らく此の間に存したのであらうと思はれる。舸子仲間への割り宛ては不明である。

以上を要するに、當時の室戸に於ける鯉漁は、勿論これが捕鯨業の比ではなかつたにせよ、幾分進んだ型態の下に行はれてゐた様である。即ち資本の點より見れば船主が大體各自の財産を據出したのであるが、漁業經營者と節製造商人とは實質に於ては分離して居り、生鮮の鯉が商品としてナマシによつて都市に輸送され、又五十集乗組専門の人々が居り、更に又部落の漁夫は四季を通じて見れば各種の漁撈に従事して種々の技術に訓練せられてゐた點を、その特色として擧げ得ると思ふ。

今日、室戸町に於ては、前述の市街地をなしてゐる部分は戸數八百位であり、以前に比較すると商店が増加し、質屋が減少し、米屋、船具店等が專業となり、カフエーが増えて來てゐる。カフエーの女給には水平社の娘が多く出るといふ。右八百戸の内、七分位は田畑を所有してゐて、主として女がそれを耕作してゐる。が然し作つた穀物で一杯／＼に生活してゐる家は、十軒位に過ぎず、他は年中食ふには足らぬ程度の收穫に過ぎない。従つて各家の勞働の主力は、漁業に注がれてゐる譯である。今、室戸町全體の生産物價格を見ても、此の間の消息は窺はれると思ふ。

| | |
|-----|-----------|
| 水産物 | 八一二、四七八圓 |
| 農産物 | 一七一、五一四 |
| 工業物 | 一一一、六〇二 |
| 其他 | 五九、九三六 |
| 計 | 一、一五五、五三〇 |

かくの如き部落に於て、鯉船の總數は昔と大體變らず十二・三隻である。而して今日に於ては、以前の如く冬期捕鯨業が行はれぬ故、曾て捕鯨業に従事してゐた丈けの人数は、何れかの漁業に従事しなければならぬ。それで今日では小漁船(小職)が七十隻位あり、又鯉船は大型にして四十噸級のものが建造されて、鯉漁以外鮪延縄なども兼營して、冬期も出来る限り出漁する事に努めてゐる。

従つて此の部落の漁業は、沿岸漁業と遠洋漁業とに分れる譯である。先づ沿岸漁業について見るに、これは夏冬通して行はれるものであつて、一隻に五・六人乗り組む。冬はメジカを釣る。メジカ漁は日歸りであつて、餌はシラス、チリメンジャコ等の鹽にしたもの、これを仲間で購入し漁具は各自持ちである。純益は船代四分、船員が六分をとつて仲間分つ。夏は鯖、横輪等を釣りに出るが、組織は冬期と大體同様である。船を所有せずしてかゝる漁に乗り組む漁夫が三百人位あるといふ。次に沿岸漁業と遠洋漁業との漁獲高の比較をして見よう。

| | | |
|-------|----|------------|
| 沿岸漁獲物 | 魚 | 四〇五、二三〇貫 |
| 其他 | | 一 |
| 遠洋漁獲物 | | 六四三、七三〇 |
| 計 | | 一、一五〇、三六五圓 |
| | 魚 | 五、九〇〇 |
| | 其他 | 五〇三、五三〇 |
| | | 七五九、七九五 |

右の統計によれば、此の部落の漁業が遠洋に大なる意味を持つてゐる事が明であらう。それ故我々もこれより遠洋漁業の觀察に移らう。

此部落の遠洋漁業は大正十年以後の事である。それ以前にも動力船は存したが、まだ小型のものであつて遠洋には出でず、土佐近海で漁業を営んでゐた。それが次第に大型漁船になり、今日に於ては、南は鹿兒島から北は北海道近く迄黒潮の流域を利用してゐる。目指す魚類も鯉のみでなく、冬期は鮪漁等をもなして、出来る丈休漁期間を短縮せんと努め、多角形的な經營方法をとつてゐる。

擬今日一隻の漁船を建造するに要する金額は

卅五噸級にして 一萬五千圓位

四五噸にて 二萬圓以上

外に漁具 千五百圓位

而して經常費は如何といへば、一航海(十日間位)に七・八百圓を要するといふ。因に、その内譯は油六分、米一分五厘、餌及漁具一分五厘、氷一分である。尤もこれは鮪漁の時の割合であるが、鯉漁の場合には餌の方が一層張るといふ。以上の如き資本額の出所を見るに、自己資本をのみ利用してゐる者もあるが、又共同出資に依つてゐる者もある。殊に大型船(四十噸級)五・六隻は、親戚關係の者が五・六人宛の共同出資の形態をとつてゐる。以前にも此の種の出資形態は存したが、その結果は良好ならずと聞いた。が今日では順調に行つてゐるらしい。出資者が此の種の經營に訓練された爲、かゝる形態が發達して來たのであらう。それから又資本家にして、自らは直接漁業を営んでゐない者も参加してゐる。例へば米屋が三人、雜貨商が二人等の如きであつて、此の種の資本家が十一三人位ゐるといふ。何れも利潤の追求に熱心なる資産家である。尙資本は農村の方よりは入らぬらしい。農村では、例へば病院を村營するとか何かによつて、有力者の指導で村自らが各種の事業を営む傾向

が強くなつて居るからだといふ。

次に經營者が舸子を雇備する點について見よう。舸子として乗組む者には昔乍ら土地の者が多い。居船頭が舸子をきめる場合には前金廿圓位を貸す。鹿兒島方面へ出漁する船では一月中旬に乗組を決定するが、土佐沖で漁をする場合には四月中旬にきめるといふ。四月中旬に乗組を決定する連中は、それ迄土佐沖で鮪延繩漁をやつてゐるのである。さて鯉漁船に於ける役の決定は、乗組決定の酒盛の時に、船頭が各船員に指名するのであるといふ。その場合船頭が一番上座の床前に坐り、その脇に網張船頭及び機關長が坐り、他は勝手に席をとつてゐる。船頭は先づ舸乗りの者に「舸乗り頼む」と云つて盃をさす。舸乗が此盃を受けると約束が定つた事になり、次に船頭は二番脇、舸のおも棍、棍の上、艙の下と、順に盃をさして契約し、次に舸の取棍の一番から順に盃して役を決定する。此の場合役によつては不満で怒る者もあれば、賃錢に不平を云つて盃をうけず、暇をくれと云ふ者もあつて、その爲居船頭は心配して満座の中央に成行を伺ひ坐つてゐるといふ。

右の如く乗組を決定して、愈々出漁するのであるが、近來は鯉漁のみでなく鮪漁も行ふ。大體から云へば夏を中心として鯉漁を行ひ、寒い時節に鮪漁を行ふ様である。が然しその季節は必ずしも確然としてゐる譯ではなく、臨機に鮪漁のある時は鮪漁に轉ずるし、又早春期でも鯉漁があればこれを行ふ様である。元來、此處の漁夫は浮津にしる室津にしる、以前から季節に應じて色々の漁撈を営んで來た。夏期は鯉漁に主力を注ぐにしても、其他にも小規模の釣漁もあり、冬期は浮津は鯉漁を専らとし、室津はメジカ其他の釣漁をなしたのである。従つて新なる漁撈に早く順應する事が出来るであらうから、これが室戸今日の遠洋漁業の如く、多角形的經營が容易に行はるゝに至る一因でもあらう。

漁は、一月頃鹿兒島を振り出しにしてそれから室戸に來、四月頃までこゝにゐて五月には神奈川縣三崎港にゆき、六月には釜石、七月から十一月迄青森邊へ迄行く船もあるといふ。それから又南下するのである。

阿波由岐村の漁夫が毎年若干名此處の漁船に乗り組む。所で、此の漁夫の家族が主人の跡を追ふて室戸に來、十一月から四月頃迄、家を借りて住んでゐる。それから一時故郷へ歸り、五月になると又主人の跡を慕うて三崎にゆき、其處で亦少時假住居するといふ。かゝる家族が、室戸へは甘家族位來てゐる。家は年中借り切りらし、三崎に移轉した後の空家には、別の人が住んでゐるのを見掛けなないといふ。だから室戸にゐない時でも家賃を半額位は拂つてゐるのであらうと。此の如く家族が常に主人の跡を追ふのは、主人一人で置くと儲けた金を皆浪費して了ふからである。因に、子供は移住する先々の學校へ入學させるさうだが、成績は餘りよくないらしい。それは兎に角、今日多少でも他國の漁夫を雇ふと云ふ事は、以前には見られなかつた注意すべき現象である。

進んで販賣を見よう。各船は漁獲した魚類を各地の港（漁業根據地）に卸して賣却する。従つて販賣方法等は各地に依つて夫々異なる事勿論であるが、此處では室戸の販賣についてのみ述べよう。此の港には又、室戸の船が他國の港に荷を卸すと同様に、他國の船も此處へ入港して魚を揚げる故、仲々繁華である。魚市場は港の岩壁に接して建てられてゐる。舊來の如く共同販賣であつて、魚商人は縣の許可をうけ商人札を貰つてゐる。漁獲物は漁船から直ちに市場に揚げられて、是等商人に競賣される。市場の手數料は千圓について五分五厘であり、此の内二分八厘が眞實の手數料にして、其他は縣稅、町稅縣水產會費等である。魚市場は以前の如く尙徵稅の任務を有してゐるのである。

買ひ受けた魚商人の方は、市場への支拂は毎日現金拂が原則であるが、實際にはそれが不可能の場合が多いので、毎年三月卅一日が年度末となつてゐる。商人相互が連帶責任を負ふ事は昔と同様である。扱商人が購入した魚類は如何なるか。勿論節にも製造するが、今日に於てはその大部分は生鮮のまま、夫々の販路へ輸送されて了ふ。次の表がこれを示す。

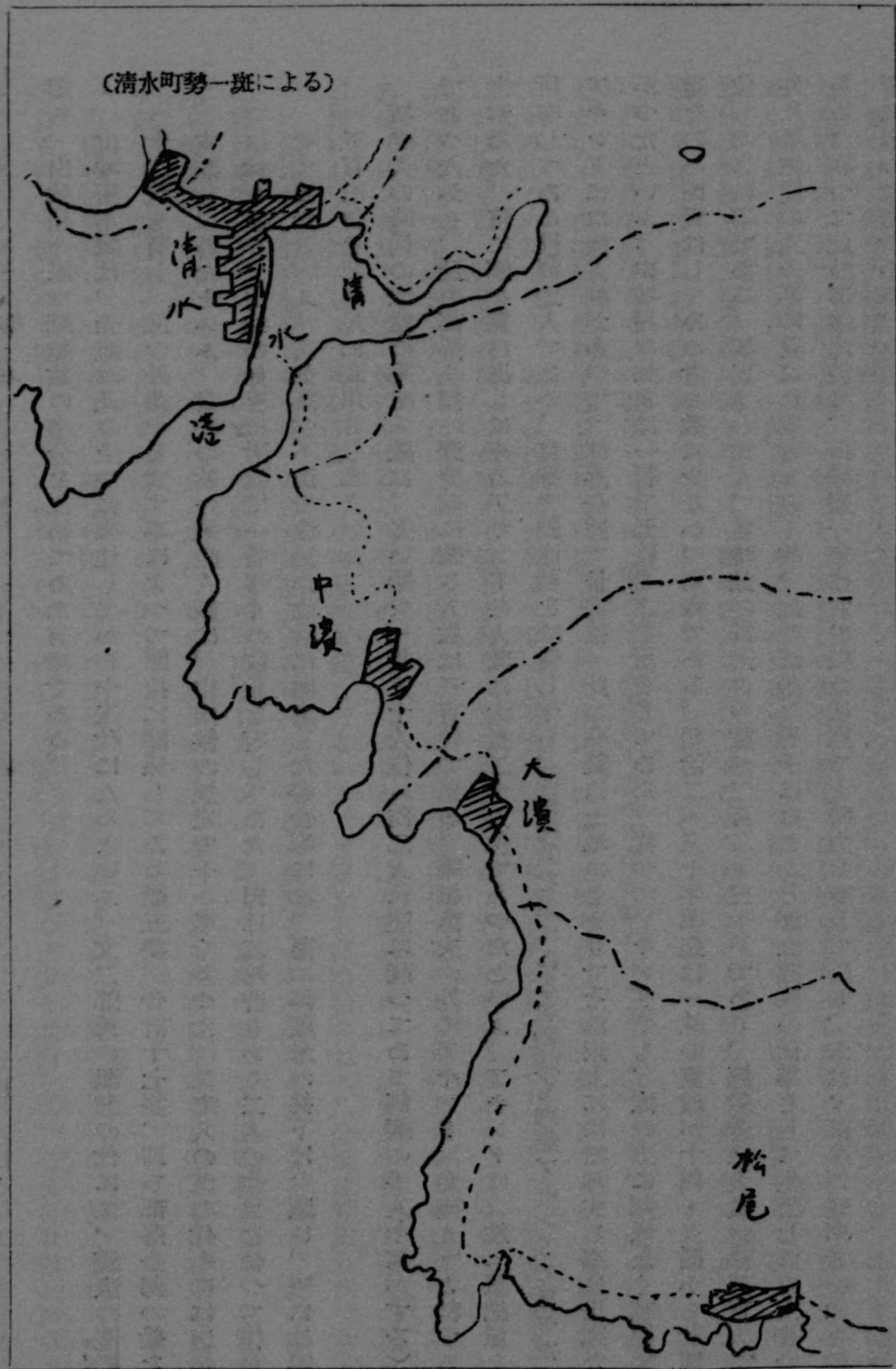
遠洋漁獲物 六四三、七三〇 貫 五〇三、五三〇 圓

| | | |
|-----|--------|--------|
| 製食料 | 一八、三五〇 | 五二、四〇〇 |
| 造肥料 | 一、六〇〇 | 二〇八 |
| 物魚油 | | 七五 |
| 計 | | 五二、六八三 |

販路は神戸大阪が多く、高知にもゆくといふ。が土地では餘り消化されない。輸送機關には室戸に廻船商があり、それが發動機船を所有して各方面と連絡を圖つてゐるので、魚商人はこれを利用する。回船の人夫には以前の如く後免部落の人が多いといふ。右述べた如く、魚商人はその荷を主として阪神の大都市に送る仲買商であるから、相當の信用と資産とを有してゐる者でなければ出來ない所である。

最後に鯉漁船の分配法を見よう。水揚高の内から總經費を控除し、純益を舸子仲間が四分五厘、船主が五分五厘をとる。舸子仲間の分配は船長二代、機關士二代、油差一代四分、炊四分、舸子一代宛である。代の外に菜の魚がある。以前は漁獲高の三分であつたが、近頃では船主と舸子との約束によつて定め、千圓以上の漁獲の場合にのみ釣上の三分を舸子一同が貰ふのである。菜の魚は舸子一同が平等に分配する。尙分配法としては、當皆（代分け）制度の方が多いといふ。

之を要するに、今日此の部落の鯉漁業は、曾て漁業と節製造業との分離しつゝあつた過程を一層發展せしめ、漁業の方面に於ては以前よりも多角形的合理的な經營が行はれつゝある。これを可能ならしめた原因としては、利潤の追求に熱心な資産家が多く資本の調達が比較的自由な事、經營技術が熟達して來た事、土地の漁夫が種々の釣漁に熟達してゐて新技術への順應が早い事、等を挙げねばならぬが、又各地に於ける鮮魚の需要が逐年増加しつゝあつた事も記さねばなるまい。それは小にしては、此の部落の鮮魚輸送機關の發達を促して、消費都市への輸送を自由ならしめるのみならず、大にしては、九州から北海道邊の主要漁港に於て鮮魚の取扱が増加し、徒



つて我國の鯉鮪漁業は何れの主要漁港を根據地とするも尙これを營む事を可能ならしめられたのである。鮮魚需要の増加は、かくて鯉鮪漁の發展を促したとも云へる。然し又それは他の一面に於て、此の部落に於ける節製造業の發達を、漁業のそれに追従するを得さしめなかつた様に思はれる。即ち、從來節製造を専ら行つてゐた魚商人が、單に仲買人として立行かんとする傾向を促しつゝある。更に又鯉漁業發達の他の條件としては、此の部落が良港を有してゐて漁業商業の何れを通じても地理的條件にも恵まれてゐた點を見逃し得ないと思ふ。

註 統計表は室戸町勢要覽による。

2. 中ノ濱部落

老人(山崎文二郎氏七十歳)の若かつた當時は、中ノ濱部落の戸數は二百二・三十戸位であつた。此の内、鯉漁船を所有してゐた戸數は十戸位であつて、鯉船の隻數は十二・三隻であつたといふ。その主なるものを列記すると

| | | |
|-------|-------|----|
| 山城屋本家 | 山崎文二郎 | 二隻 |
| 同 分家 | 山崎勝太郎 | 二隻 |
| 同 分家 | 山崎重精 | 一隻 |
| 同 分家 | 山崎善太郎 | 一隻 |
| 山崎彌之介 | | 一隻 |
| 泉淺太郎 | | 一隻 |
| 佐々木竹治 | | 一隻 |
| 吉本善太 | | 一隻 |
| 中谷荒太郎 | | 一隻 |

山城家一統

即ち、山城屋一家で總船數の半分を占めてゐた有様である。

山城屋本家は、先祖が此の土地に來住してから十三代になるといふ。文二郎氏の祖父の代には、鯉漁の直船^{チキボネ}十二隻も有し、此の外銀子を貸す事によつて間接に關係してゐる船五隻、合計十七隻、即ち部落全部の船を支配してゐたといふ。當時の船の乗組人數は、山内候の規定で十一名であつた。又老人の父の代迄には田畑山林もあり、山林の如きは附近で一番多くの段數を有してゐた。田は二町許りあり二人の作男を使つて作らせてゐたといふ。又部落が不漁で漁民が生活に困窮した場合等には、藩に御藏米の拂下げを願ひ、時には四百石位を部落民に利用させたといふ。

扱老人の時代の漁船の乗組人數は、多い船で一隻三十人位（内二人は陸に残つてゐて餌網の手入や何かする）であつたから、此の部落全體の鯉漁船に乗る人數は三百位である。乗組漁夫の外にアキンド（魚商人）と稱する者がゐた。濱に鯉を買ひ出しに來るアキンドの人數は大抵二十人位であつたといふ。アキンドは、總て釜納屋を所有してゐる節製造人である。自身で鯉漁船を經營し乍ら、節製造業を兼てゐる居船頭も勿論アキンドであつた。アキンドには商人株があつて、部落全體で卅株位。此の株數は土地のきまりでそれ以上には増加する事は出來なかつたといふ。山城屋の如きは一軒で五株も之を所有してゐた。従つてアキンドでも、漁の方に關係なく唯節製造のみ商賣にしてゐる者の數は少なかつた様である。明治二・三十年頃迄は一株の値段が十四・五圓から廿圓位したとの事である。扱以上の如く、當時此の部落の戶數が二百二・三十戸であり、鯉船乗組人員が約三百人位外に釜納屋の工夫等に雇はれる者もある故、此の部落の男子はほとんど鯉漁關係の仕事をして生活してゐた譯である。従つて此の部落に於て、山城屋一家は右の様な状態で大勢力を有して居り、云はゞ部落の統率者の如き位置にあつた様である。

先づ此の部落の鯉漁業經營の方から見てゆかう。資本の點について見るに、以前には山城屋が他の船主に融資した事もあつたが、然し當時は大體各船主が自己の財産に應じて自分資本を利用したらしい。年々の仕込が一隻につき約二千圓位であつて、船を新造した場合には建造費が一干圓位はかゝつたといふ。經費を最も多く要する部分は生餌を買ふ場合の代償であつて、總經費の半分はこれにとられるといふ。船員を日雇で乗せる時には、賃銀にも多く占められた譯である。

次に船主と舸子との間の關係を見るに、親方子方の關係の割合に濃かつた家もあつたやうだが、一般には薄かつたといふ。山城屋では舸子は日雇にして雇つた。他の漁家では當皆で乗り組ませた様であつたが、昔は日雇の方が多かつた様である。當皆は山城屋が覺えてから出來たといふ。船主自ら乗船しない場合には、沖船頭迄も雇はねばならぬ。沖船頭は同一の船に十年位も永續して乗る者もあるが、舸子に至つては永くて三年位であるといふ。沖船頭でも漁が當らなければ自分から遠慮して、他の人を船頭に推すといふ。乗組をきめるのは前年の秋である。即ち九月十月頃、鯉漁期が終ると翌年の乗組が定められる。之を定めるには、居船頭が舸子に翌年の漁を目當にして前銀を貸して契約を結ぶ。年の暮にも貸したといふ。日雇ならば給料の七・八分迄は貸與した。年が明け舊正月二日に胸合はせの時、船頭が乗組員全體に向つて役割（舸乗りとか小船頭とか）をきめる。此の部落は鯉釣專業の部落であつたので、昔は殆んど周年出漁したといふ。従つて當時に於ても出漁時期が早く、出漁期間も他部落より多かつたのであらうと思ふ。春から夏が過ぎ秋となり、舊九月晦日になると終了をつけ乗組員が解散する。此の時一切の勘定を精算するのである。

漁獲物の販賣について見よう。船主仲間は年々に漁物取扱人を選挙で定める。此の取扱人は、鯉の濱揚げの場合立ち會つて鯉の數を検し、賣買の帖付をなす。然して各船から漁獲物の三步を天引して、これを取扱人がまとめて上納する。船から陸揚げされた鯉は、一度此の漁物取扱人の検査を経て、それから居船頭の手にか或は漁に

關係のない商人へ賣り渡される。

續いて分配の方に移らう。日雇漁夫を以て經營してゐる船では損益は原則として經營者が負擔する。乗組員は身體一つを以て乗船して、契約當時きめた給料を貰ふ。昔は沖船頭でも一ヶ月僅か五圓位であつたといふ。が老人の時代には一ヶ月三四十圓であつた。並の舸子で十二・三圓位であつたらしい。尤も水揚高から五歩を差引き、これを乗組各人の骨折に應じて（これは沖船頭が不斷に注意してゐる）分配する。これを五歩菜といふ。當皆制度では乗組員が労働のみを提供して或程度の損益を負擔する。即ち、先づ總水揚の内から上納の三分、取扱人の給菜の五歩及び居船頭の取り前として二割五分を天引する。次に諸經費を控除して後の分配法は次の如し。沖船頭一人半、炊七分、船代九人半、他の乗組員一人宛。

尙納税の事について附言して置かう。税は前述の如く水揚の三分である。庄屋のあつた時代には、庄屋給を百本について五本引かれたといふ。庄屋の家にも納屋があり、庄屋給を此の納屋で節にした。庄屋の納屋番を給納屋番といつた。

漁業の方の話は以上の程度に止め、次に節製造の方の話にうつらう。當時此の部落では鯉は生鮮のまゝでは食用に供せず、皆節に製造したといふから、此の部落の節製造業は可成り重要なものであつた。それ故是については稍詳細に語らう。扱節製造人は居船頭及商人であつて、皆釜納屋を所有してゐた。居船頭の釜納屋の人数は大體鯉船一隻につき四人位（先に出す）であり、それ以外にはシチクリ人やバラヌキ等を雇つたのである。當時船二隻を有してゐた山城屋の納屋には、釜数が三枚あつたといふから、他の居船頭や商人の納屋の大きさは推して知るべく、釜数は一・二枚のものであつたであらう。釜は大坂から一枚三十圓位で買つて来たといふ。納屋番は月給で雇つた。本納屋番は鯉船の船頭位の月給を貰つてゐたといふ。本納屋番の下が相手納屋番一人、走り使一人、奴一人であつて、給料は次第に下つた事勿論である。以上の人々は不斷抱えられてゐたのである。常節作り

が六―八人位ゐた。節季から約束して抱えて置くのであつて、給料は一日幾らといふ日當である。但し米價の高低に應じて高低があり、米にして二升、二升五合位であつた。日當であるから仕事のない場合には出勤しない事勿論であり、又仕事があつても缺勤した日には給料は貰へない譯である。常節作りは土地の人々である。バラヌキ女も日雇で雇つたやうだ。愛媛縣船越、内泊方面から来たが、後には土地の女を雇う様になつたといふ。愛媛縣からは此の部落に三・四十人も一團になつて来て、それが五・六人宛民家に宿をとつて節製造の季節中雇はれたといふ。節の最もよく出来る季節は四・五月である。これを春節と云つて最も珍重する。焼上げも春の内だけ作るといふ。七月以後出来るものを秋節といふ。大體節のよく出来る製造期間は、四月から十月迄の七ヶ月間である。昔は終年鯉の漁があり、従つて終年節を製造したらしいが、然し節が實際によく出来るのは前記期間であるといふ。日雇連中は大體此の期間中雇はれるのである。

以上の如くして夫々居船頭や商人の納屋で製造された節は如何なるか。山城屋では老人の若い時迄鯉節五十集が五隻あつたといふ。その船は次の如し。

春日丸（二百石） 儀吉丸（八十石） 儀徳丸（五十石） 春榮丸（五十石） 小春日丸（五十石）
又、山城屋の分家山崎勝太郎氏の父も鯉節五十集を二隻所有してゐた。
長久丸（百石） 天神丸（五十石）

右の如く山城屋一統は節船を所有してゐたから、自家製造の節みならず此の部落の製造業者の製品を買ひあげて積荷となし、それを主として大阪方面へ輸送した。大阪の節問屋は靱の天一であつたといふ。節船は六・七月に出で一航海に一ヶ月位を要し、一年に二航海位したといふ。後、時代が降ると東京の方へも出荷した。東京の間屋はニンベンであつた。以上の外に傷節は下ノ關へ出した。節船の乗組人数は春日丸が五人、他は三人位であつた。即ち春日丸には船頭、親爺、炊、若者二人が乗つた。是等乗組員は皆土地の者で、月給を以て抱えてゐた。

宇佐から船頭が一人来てゐたといふ。尙節製造の副産物である骨粕は日向から買ひに来、煮汁は自家用の肥料にしたり、或は出入する百姓に遣つたりしたのである。山城屋本家には尙以上の外に廻船が四隻あつた。主として炭を積むので炭船とも云つた。

すみとく丸(百二十石) すみよし丸(八十石) すみふく丸(百石) すみとし丸(八十石)

炭船の中には御用船になつて東京へ行つた船もあつたといふ。廻船に乗組む人々は土地の人もあつたが、下の加江よりも人を雇つたといふ。その人数はすみとく丸が十二人であつて、他はこれより少なかつた。炭の外に材木も多少積んだといふ。積入はみさき、下の加江邊である。炭は自製のものも積んだり、或は他から買ひ込んだりしたものである。節船も廻船も不斷は清水港へ入れて置いた。廻船の乗組員も月給で雇つてゐたのであつて、是等の人々は出航しない時には山城屋の用事を手傳つてゐたのであるといふ。

又部落内で入用の米や雜貨類は、右の五十集が上方から積んで来て、これを山城屋で附近の者に賣りさばいたといふ。

之を要するに當時に於ける中ノ濱部落は、殆んど鯉漁及鯉漁製造業に關連して成り立つてゐる部落であつて、その漁撈、製造、販賣の中心をなすは、實に山城屋であるかの如き觀があつた。

今日の中ノ濱部落は如何なつてゐるか。それには先づ次の表(註)を一瞥する方が便利である。

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|------|----|----|-----|-------|----|
| 清水 | 中ノ濱 | 松尾 | 清水 | 中ノ濱 | 松尾 | 清水 | 中ノ濱 | 松尾 | |
| 呉服商 | 一〇 | 二 | 三 | 自轉車業 | 三 | 〇 | 〇 | 精米所 | 五 |
| 米穀商 | 一二 | 八 | 五 | 醫師 | 五 | 一 | 一 | 物品貸付業 | 三二 |
| 料理商 | 九 | 〇 | 〇 | 代書業 | 三 | 一 | 一 | 樽屋 | 三 |

| | | | | | | | | | |
|---------|----|----|----|------|-----|-----|-----|--------|---|
| 宿屋 | 一〇 | 一 | 二 | 郵便局 | 一 | 一 | 一 | 備屋 | 一 |
| 水産物製造販賣 | 四三 | 二一 | 一六 | 銀行 | 二 | 〇 | 〇 | 飲食店 | 六 |
| 酒類店 | 二六 | 七 | 五 | 漁業 | 一三一 | 一三二 | 一〇二 | 指物商 | 五 |
| 雜貨商 | 〇 | 〇 | 〇 | 問屋業 | 七 | 六 | 三 | 酒醸造業 | 一 |
| 石油商 | 〇 | 〇 | 〇 | 仕立業 | 一九 | 八 | 四 | 製氷會社 | 一 |
| 金穀貸付業 | 七 | 五 | 四 | 菓子屋 | 三〇 | 一〇 | 五 | 洋服店 | 一 |
| 質屋 | 二 | 〇 | 〇 | 半農半漁 | 一一 | 六三 | 四二 | 水産會事務所 | 一 |
| 回漕業 | 一四 | 〇 | 三 | 左官大工 | 三五 | 二〇 | 一四 | 劇場 | 一 |
| 湯屋 | 五 | 一 | 〇 | 理髮業 | 一二 | 一 | 一 | 漁具販賣店 | 八 |
| 疊屋 | 四 | 一 | 〇 | 染物屋 | 五 | 〇 | 〇 | 彫刻業 | 二 |
| 鐵工業 | 五 | 〇 | 〇 | 提灯屋 | 一 | 〇 | 〇 | 藥種商 | 八 |
| 煙草元賣捌 | 一 | 〇 | 〇 | 石工業 | 一 | 〇 | 〇 | 貴金屬業 | 二 |
| 珊瑚商 | 二 | 〇 | 〇 | 仕出商 | 三 | 〇 | 〇 | 陶器商 | 八 |
| 官衙 | 八 | 〇 | 〇 | 西洋洗濯 | 一 | 〇 | 〇 | 鯉節倉庫 | 一 |

計 五六四 三二二 二二二二

總戸數三一二の中最多くを占むる職業は漁業の一三二戸と、半農半漁の六三戸であり、次では水産物製造販賣廿一戸と、雜貨商の二〇戸である。漁業部落たる事明であるが、然し今日此の部落では遠洋漁業は行はれてゐないといふ(吉福氏談)し、又節製造業者は水産物製造販賣廿一戸中僅か四名に過ぎない。昔時、松尾部落と共に華かなる鯉漁村としてその名を唱はれた此の部落は、今日に於ては全く昔時の面影なく、唯單に沿岸漁業の部落として存在してゐるに過ぎない事を思はしめる。然らば何故かくの如き變化を蒙つたか。



此の邊（清水、中ノ濱附近）で漁船に動力が利用され出したのは明治四十四年頃であるといふ。當初は動力船と云つても、餘り沖合へは出漁しなかつたが、大正十年前後になると加速度的に大型の漁船が建造され、従つて漁場を沖合に求めて次第に遠洋に出掛る様になつた。今日では清水邊では四・五十噸級の船で鹿兒島邊へ迄も鯉群を迎へ釣るといふ。大型漁船になると、従来の和船の如くこれを隨時随意に海濱に曳きあげる事が出来ず、又漁場が遠隔の洋上に遷つた事は、一々その故郷に漁獲物を持ち歸るといふ事を不可能ならしめた。かゝる漁船は、故郷を離れてもその根據地を他國の良漁港に求めざるを得ぬ。されば此の如き趨勢に當り、良港を有せざる中ノ濱部落には鯉船の出入が自ら減少し、鯉の陸上げが又自ら少なくなつて來たのである。従つて、以前の様に自船が採つた鯉を舟主自らが節に製造する事が次第に困難になり、漁業經營と製造經營とが自ら分離せざるを得なくなつた。此處を端緒として、此の部落の變化が次第に深刻になつて行つた様である。

先づ漁業經營の方から見よう。元來が此の部落は鯉漁に傳統を有する所であり、鯉漁以外の漁業は以前には殆んど存在しなかつた。云はゞ唯鯉漁にのみ囚はれ過ぎて、外の漁業を省みなかつた（吉福氏談）。さて實際について見るに、大規模の鯉漁船を仕立る場合には四十噸級の漁船で建造費が二萬圓内外必要とされ、其外に漁具や何かにも多大の費用がかかる。鯉の盛漁期は四月から十月迄の七ヶ月間である。従つてもし此の漁船が、鯉漁のみ出掛けるに止るとするならば、莫大な費用のかゝつてゐる船を約五ヶ月間位寝かせて置かねばならぬ。是れを避け、周年殆んど此の漁船を利用せんとするならば、冬期を中心として最も有利なる漁撈（鯉漁以外の）に従事しなければならぬ。此の期間の有望なる漁撈は一般に鯖漁である。従つて此の部落でも冬期は鯖釣に出漁すればよいのであつた。所が遺憾乍ら此の部落に於ける漁夫は従來鯉漁のみを固守して來た爲、鯖漁に轉ずるには技術的困難が、伴はざるを得なかつた。

吉福氏は此の部落の漁夫は鯉漁にばかり執着して、鯖漁を顧なかつたと云はれたが、これを更につきつめて云へば従來鯉釣以外の漁はほとんど行はず唯一途に鯉漁のみを營んで來た爲、鯖漁をも兼營すべき時節に遭遇しても、これに困難を感じざるを得ず、云はば室戸部落の漁民の様に、新なる漁撈に對して順應性が強くなかつたもの、様である。此の爲、漁業の多角形的經營が良好に行はれず、山城屋本家先づ斯漁を廢し、山崎勝太郎氏もやがて節製造業専門に轉じて、山城屋一統が遂に斯の如く成り了つたやうである。此の一統にして右之如くである以上其他の漁業經營者の成行推して知るべきであらう。かくて此の部落は、遂に遠洋漁業を主眼とする部落として立ち直つてゆく事が出来なかつた如くである。これを機會として、今迄鯉漁に關係してゐた漁家は小釣漁業に轉じたり、或は又外國へ出稼に行つた者も多くあるといふ。曾ては屈指の鯉漁部落として、十餘隻の漁船を擁して隆盛を極めてゐた部落も、漁村への動力移入に際會しては、遂に新なる技術と經營とに順應して行き得なかつたのである。

次に製造業の方面は如何。節は以前は周年作つた事があつた。が近年鯉の貯藏法が發達して來て、生鮮のまま方々へ販賣され得る様になつた爲、思惑師（ナマボート）が出現して投機的に生鯉を賣買する故、秋冬の頃節製造をしたのでは採算がとれなくなつた。その爲秋冬の製造は廢れたといふ（吉福氏談）。それのみでなく、何處の地方で捕獲された鯉も、近頃一般に生鯉として賞味される様になつてからは、春夏の節製造高も減少して來た。此の部落のみならず、清水港附近全體を包含して云つても、昔程は節の製造は行はれず、昭和八年度の如き清水港に八十萬尾の陸上げの内、五十萬尾は生鯉で販路へ送られたといふ。節の數の上から見ても、昔は今日の節の二倍位は製造したであらうと（吉福氏談）。何れにしても採算がとれぬ故節製造業は此の部落に於ても減少してゐる。更に又漁船が大規模化して來たので、以前の如く自船が毎日生鯉を陸上げる譯でなく、漁船は皆漁業根據地たる漁港に出入して鯉を卸す様になつた。此の附近に於ては、近年清水港が漁港として著るしく躍進して來た。清水港は明治四十二・三年頃迄は農業を主とする部落であつて、戸數二百戸位（當時中ノ濱は二五〇戸）、小船を

以て漁を営んでゐたに過ぎなかつた。中ノ濱、松尾等が當時鯉漁業部落として有名であつたに對し、清水の者は清水飯と云はれ不味い物を食つてゐる部落として蔑視されてゐた。それが大型漁船が利用される様になつてから此處が漁業根據地として漸く認められ出し、今日では戸數七百、遠く九州、關東の漁船も出入するといふ。従つて清水港は今日に於ては漁獲物の集散地ともなつてゐる。又製造した品物は、一應清水迄出し、それから夫々の販路に向ける。それ故新に節製造業を営まんとする者は、便利な清水町を選ばんとする傾向を持つに至るは止むを得ない所であらう。かくて曾ては山城屋本家を初めとして、三十名をも數へた中ノ濱部落の節製造業者は、以上の如き諸理由によつて時代變遷の波に推され、續々として廢業し、今日に於ては山崎勝太郎、山崎市三郎、吉本鐵彌、武政勘次の四氏が節製造業者として名を連ねてゐるに過ぎない。因に清水町に於ける同業者は八軒である。

以上述べた如く、此の部落は、鯉漁業に於ける動力利用と同時に面目をほとんど一新してゐる。而してそれは主として技術の方面から見たものであつたから、更に進んで資本の方面からも一瞥を加へて置かう。元來、此の部落の金融は外部とはほとんど行はれざりしもの、如く、經營者は主として自己資本を利用してゐたのである。曾て山城屋本家が隆盛の時代には、部落内の漁業經營者へ融資した事初に述べた通りである。

扱以前には、此の部落を殆んど一手に統率してゐた山城屋は、鯉漁及節製造業に關しては、他の經營者の例に漏れざる過程を辿つた事既述の通りである。更に又動力船の發達は山城屋の海運業にも大打撃を與へた。即ち曾て數隻の節船と炭船とを所有し、附近の節や炭を購入して大阪方面へ運送した當時は、無動力の帆や櫓で航海する船であつた。然るに、今日清水港を中心として活躍してゐる動力附運送船に對しては、以前の無動力船は到底これと太刀打する事は出来ない。それで山城屋では文二郎氏の代になつて、節船も炭船も皆賣り拂つてしまつたといふ。山城屋では當主は今他國に生活してゐるといふ話であつて、此の部落には、老人が昔乍らの廣い屋敷内に留守してゐる。山城屋にして右の如き經過を通つて來た以上、他の漁業經營者の資本の調達は、室戸部落に於て見た様な具合には行かない事勿論であらう。要するに此の部落の漁業經營者は、資本の點より見ても恵まれてゐたとは云ひ得ないのである。

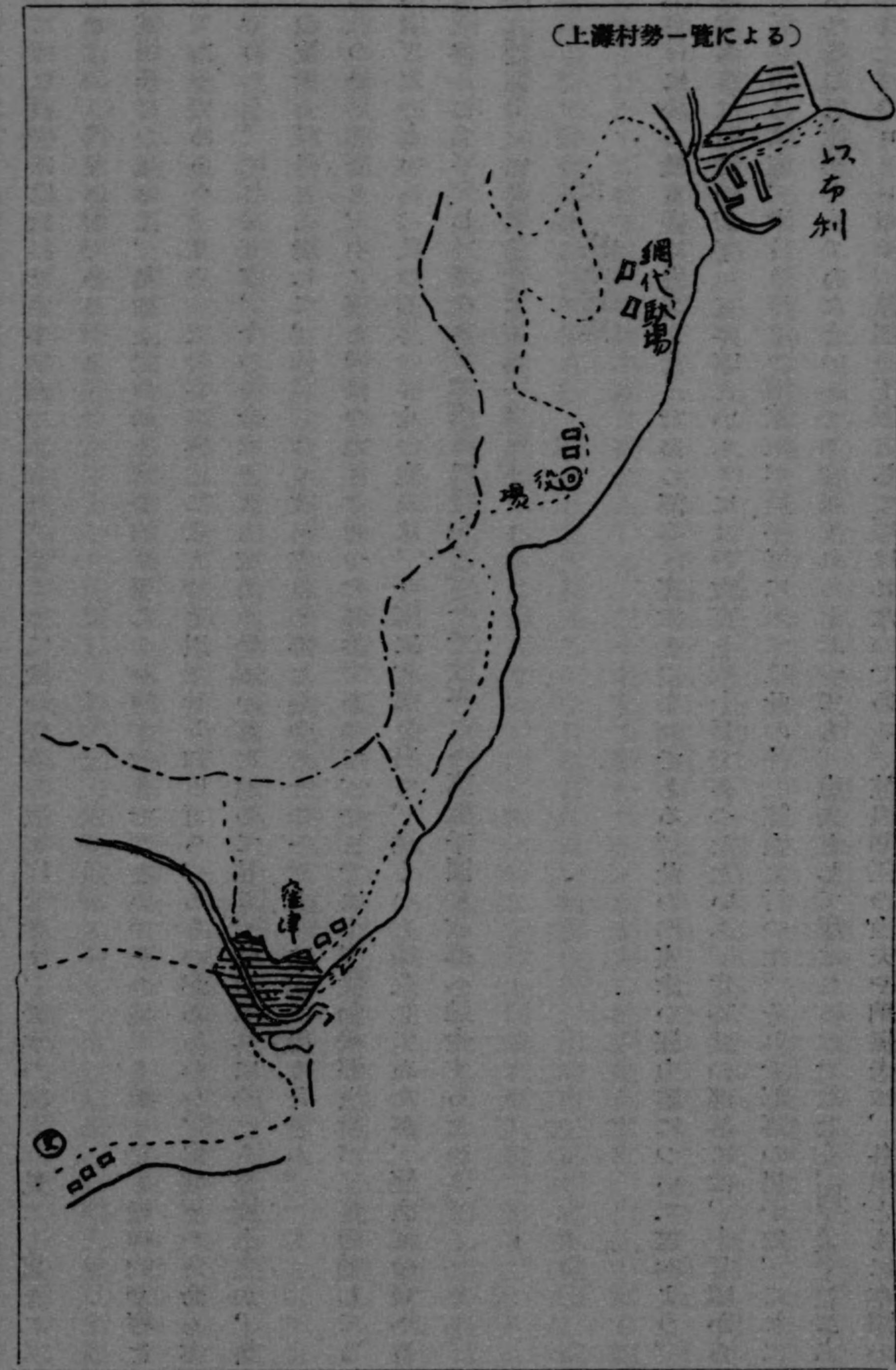
山城屋今日の運命は、勿論上記の如き經濟的原因にのみ歸すべきではない。その他にも種々なる精神的影响を存してゐるであらう。凡そ一家の盛衰興亡には人智を以て計り知る可らざるものがあるから、山城屋の運命も亦然うであらう。けれども亦、今の場合我々は山城屋の變遷の跡を辿つて見て、此の部落に於ける舊鯉漁業が、新時代の技術と經營とに對して、苦悶しつゝ、敗れざるを得なかつたその一面だけは窺ひ得ると思ふ。

附近の松尾部落も、中ノ濱と同様の過程を通つた部落であつて、今日では小型發動機鯉漁船が三隻活動してゐるに過ぎないといふ。此の部落の多くの漁夫は、今迄は故郷を出て、働くのを嫌惡してゐたが、鯉漁業の衰へるのを機會として卒先してボルネオに出稼に行つて、今では年に一萬數千圓を故郷へ送金するといふ。

註 統計表は高知縣幡多郡清水町勢一斑による

3. 窪津部落

上灘村に於て最も盛に漁業を営んでゐる部落は窪津と以布利である。此の内窪津の鯉漁業について述べよう。窪津部落は明治の初年（五年頃といふ）には戸數百七八十戸であつたといふ。當時此の部落には、十月頃から翌年三、四月頃迄、津呂及浮津の捕鯨組が隔年毎に來ては此の沖で鯨漁を行つた。それで部落の男子は、これに雇はれるのを仕事としてゐたといふ。勿論雇はれると云つても、漁夫として雇はれるのではなく、岡人夫として、鯨曳き上げのロクロ巻や、鯨切の下働として雇はれたのである。鯨組關係の漁夫や納屋夫は、各組ともに本國の方より二百數十人宛引き連れて來たし、又鯨商人も浮津及津呂の人々であつて、鯨場に出來てゐる商人小屋に漁



期中だけ出張した。従つて、此の土地の漁夫は唯岡人夫として雇はれたに過ぎない。又雇はれる人夫數も鯨の大小によつて異つてゐた。それ故彼等が出勤するにしても毎日の譯ではなく、鯨の捕れた日だけ臨時に、其鯨の大小に應じて、鯨組や鯨商人の仕事場へ出掛けたのである。其場合にも又規則があつて、各戸一人宛男子のみが順番に出た譯であるから、鯨がとれたからと云つて部落の總ての男子が出た譯ではない。それで此の部落の男子は冬場は毎日、鯨のとれるのを待つて遊んでゐて、自分の漁には出なかつた。これは、窪津の漁夫が沖へ出漁すると捕鯨の邪魔になるので、それを或程度禁止したといふ藩制時代の習慣が、尙多分に残つてゐたのかも知れない。臨時に岡人夫に雇はれる漁夫は、勞賃として出勤日に玄米三升を貰つた。然しそれも出勤日毎に貰ふ譯ではなく、年内の分は年末に、その後は鯨場引擧げの時にまとめて貰つたのである。又鯨船の大部分(一隻乗組十人前後にして十數隻)は、漁期中は大概夜分になると岸に引きあげたのであるから、それに乗組んでゐる丈の漁夫は、各一隻毎に一組となり、相當な民家を選んで下宿した。従つて、十數軒の民家が下宿屋になつたのである。その下宿代は一隻につき、漁期間中玄米四・五俵であつたといふ。尙當時部落の民衆は大抵自分の宅地は所有して居り、僅かながら畑などもあつて、麥、甘藷等をも作つてゐたらしい。が然し、男子は前述の如く鯨のとれるのを待つてゐて碌々仕事もせず、女子も寄るとさはると捕鯨の勇壯な活躍の話に耽つて餘り働かず、加ふるに素人娘さへ鯨場の御祝の時などには、喜んで酒席へ出て酌をした様な有様であつたといふ。従つて此の部落では、冬期は擧げて鯨組の騒ぎに熱中してゐたのであつて、全體の話の綜合して見ると田舎の消費的部落といふ感を懐かしむるものがある。

然し夏場は捕鯨業が行はれないので皆出漁した。就中主要な漁は鯨釣りであつて、これに従事してゐた船數が六隻あつたといふ。其外の漁業としては磯立網(伊勢エビをとる)飛魚、カマス網等があり、磯ものでは鮑、石花菜、アマノリ、フノリ、荒布、アントクメ等もとれた。此等の漁の中には多少冬期行はれたものもある。然し

何れにしても、冬期の捕鯨業には勿論のこと、夏期の鯉漁業にも及ぶ丈の規模も重要性もなかつたといふから、此等の小漁業については最後に一括して述べよう。

鯉漁業について話を進めて行く。當時此の部落には六軒の居船頭があり、六隻の鯉船があつた。別に株制度などはなかつたといふが、然し居船頭は皆釜納屋を有してゐた。舟の大きさには二種類あつて、大きい方が十八人位乗、これを元船と稱し、小さい方が十人乗位にしてこれ小職と稱した。何れの船にしても、中ノ濱の鯉舟に比較すれば数から云つても型から云つても到底及ばざるものがあつた。元船の仕込は年に千圓位かゝり、その經營費は大抵自分資本を使用した様である。が然し、當時は大抵の漁家が少ない乍らも宅地を所有してゐたのに、それが今日に於ては、鯉漁の爲にその多くが部落内の少數の資本家の手に歸してゐるといふから、その點から押せば當時自分資本を以てして尙足らぬ所は、附近の資産家から借用したのもあつたのであらうといふ。當時（四五十年前）元船の漁獲高が、大漁の年で三千圓又はその餘であつた。然し此の様な大漁は餘りなかつたらしい。又利益の點から云へば、當時元船と小職との優劣は一概には断定出来なかつた。

居船頭が沖船頭や舸子を雇ふ場合には土地の者を以てした。従つて居船頭と舸子との間には尙主従の觀念があつて、舸子が年々變るといふ様な事はなかつた。唯人數の不足の場合にのみ他部落から舸子を頼んだといふ。居船頭は舸子の一ヶ月間の入目、即ち祝儀とか法事とかの義理事にまで始終金を貸した。又七月の盆節季には、來年の大體の契約をなして幾分の金を貸し、年末正式に乗組が決定すると此時も亦金を貸した。然して或漁夫が、甲の船主の船に乗る約束をして前借をなし、其後無断で乙の船に乗つた場合には、居船頭乙はその漁夫に代つて前借金を甲へ戻さねばならなかつた。舸乗り、沖船頭等の主要な役は、雇ふ時から居船頭がきめるのであるが、細かい部分の役割は出漁前の酒盛り（むなあはせといふ）の時に決定した。秋、終漁期にはあがり祝があつて、其の時その年の契約は一應切れて了ふといふ。が契約は切れても、舸子は居船頭を頼つて金を借りに来るといふ。

舸子は親方を居船頭と呼ぶ。舸子には、居船頭は自分の家の仕事や小作等はさせなかつた。

次に漁獲物の處理を見よう。釣り擧げた鯉の半分は居船頭が取つて了ふ。残り半分を糶で商人に賣つた。商人は鯉船は所有してゐなかつたが釜納屋は持つてゐた。勿論商人札は夫々有してゐた。商人札は昔は庄屋が出したといふ。此の様な商人は三人居たが、これを振り買と呼んだ。昔は此の部落では鯉（一般に魚類はさうであつた様である）は生鮮のままでは決して節製造人以外には賣買されなかつた。

節の製造は後にゆづり次に居船頭と舸子との分配について見よう。居船頭が最初取つた半分の漁獲物は居船頭の所有となる。商人に賣却した代金から費用を控除し、残りを船が七人代（船代五ツ、網代二ツ）とり、船頭一人半、舸乗り一人二分、糶押一代一、二分、炊六―八分位であつて、他の船員は平等に一人代をとる。代の外に菜の魚がある。大菜は鯉百本につき一本、小菜は同百本に付片身の割合である。菜は別にまとめて賣り、乗組員仲間だけで平等に分配する。これには引け物はかゝらぬ。右の様に分配に於て居船頭が非常に有利であるのは、年末等に漁夫に前貸したり、不斷に舸子の面倒を見てゐるからだといふ。以上は當皆制度であるが、當時はほとんどこの制度であつたと。

納税の事について一言して置かう。税のことを漁物イサモノと云つた。又魚揚げ場とも云つたといふ。魚揚げ場の中から土地の入目や部落の費用など拂つた。庄屋給もこれで支拂つたといふ。漁師は年貢は納めなかつたらしい。その爲、百姓から見ると一般に權利はおちてゐた。御用節は、或は昔庄屋の方から納めたかも知れぬといふ。

次に製造の方に進まう。釜納屋は大抵釜一、二枚の様である。船主六軒が夫々所有してゐたし、其他製造のみを専門に營んでゐた商人が三人あつた。大方個人資本を以て經營してゐたらしい。

納屋番は臨時に雇はれる者も稀にはあつたが、多くは漁夫と同様に、翌年働く者を前年末に抱えたといふ。これは納屋に住み込であつて、土地の人間である。本納屋番は一ヶ月七、八圓の給料であつて、六圓位の者もあつ

たらしい。小さい納屋では納屋番は一人であるが、大きな納屋では一人ではなかつたといふ。

納屋で製造された鯨節は、商人自身で高知邊の市場に送る時あつたが、買ひに來た他國の商人にまとめて賣る場合もある。販賣先は高知か大阪で、その他には餘り出さなかつたといふ。

以前の鯨漁業は此の位にして置いて、これから現在の斯漁を見よう。

今日窪津部落の戸数は二百戸位になつてゐる。此の内土着の人数は昔と餘り變つてゐないといふ。従つて他村よりの入込が二十戸位ある譯である。

以前は皆宅地は所有してゐたが、今日では漁業の不振と生活難の爲め、部落内の有力者に兼併せられて了つた者が多い。畑は極めて細分して耕作してゐる。畑作は婦人の仕事である。捕鯨組時代の婦人は捕鯨の騒ぎに熱中して餘り働かなかつたが、此の頃の婦人はよく働くといふ。

此の部落は、曾ては、冬期は捕鯨場所として知られたが、今日では定置漁業の部落として成り立つてゐる。

定置漁業の發端は明治三十三年に初る。中野武次郎氏が大敷網の有望なるを見て、窪津大敷組合を組織し、此地の漁業組合と謀つて幡多郡川口龜井源七清水町上原清馬他六名をして出資經營せしめたるに始る。此の漁業は途中捕鯨業と利害相反して衝突し、一時中絶したが、後和解してその經營を今日迄繼續してゐる。捕鯨業は明治四十年頃銃殺方法に代つた爲、從來の捕獲方法は廢れて了つた。それで鯨場所としての窪津は最早存續し得られなくなり、それで大正五年に至り今迄の定置漁業とは別に、又斯業を起し、高岡郡須崎町高陽組でこれを經營する事になつた。かくて、今日では二張の定置漁業を營んでゐる譯であるが、出資者は何れも部落外の人であつて、部落の漁夫はこれに雇はれてゐるのである。此の定置漁業は、大體一月―五月の間を漁期としてゐるのであつてそれに要する人数は如何といへば、網一張について漁撈長二人、船頭三人、漁夫約四十人位である。従つて二張

では約百人を雇ひ入れる事になる。此の部落の漁夫の主要部分が、此の漁業に吸收される譯である。而して漁夫が貰ふものは月給であつて、平均廿六圓出勤日數に應じて日割計算される。勿論此の外に菜は貰へる。

夏場は鮪落網漁業に替る。此の漁業の規模は前者よりやゝ小さく、人員も漁撈長二人、船頭一人、漁夫廿二人位で足りるといふ。給料は月廿二圓位である。

鮪落網漁業は鮪のそれより小規模である。従つて夏場は又鯨釣漁業に行く者もある。鯨漁船は三隻位あるといふ。其一隻の乗組人員は船長一人、機關士一人、船員十四人、合計十六人位、三隻合して三十數人に過ぎない。これだけの人數が沖乗りをしてゐるのである。以前には、鯨漁に十人から十七・八人乗の船が六隻出てゐたといふから、人数から云へば今日に至り却つて減少してゐる譯である。

鯨漁船の大きさは十一噸位、馬力は十五位であるといふ。従つて近海漁船である。その資本や經營費等は次の如し。

| | |
|--------|--------|
| 建造費 | 三、〇〇〇圓 |
| 漁具及副漁具 | 四〇〇圓 |
| 燃料 | 一、二二八圓 |
| 食料 | 二五〇圓 |
| 飼料 | 六四〇圓 |
| 其他 | 一二〇圓 |
| 資金組織 | 六〇〇圓 |
| 出資人 | 五〇〇〇圓 |
| 共同出資 | 五〇〇〇圓 |

漁船隻数 三隻

此の部落では此の程度の漁船が最大級である。然してその資本組織を見るに、個人資本が六〇〇圓、共同資本が五〇〇圓とある。後者は、恐らく組合の方から融資してゐるものではないかと思はれるが、何れにしても十噸内外の、而も此の部落としては最大級の漁船に共同出資の型態をとるといふ事は、漁業資本家らしい資本家が此處には少ない事を示すものであらう。因に、窪津及び以布利の二漁業部落に於ける一ヶ年間一戸の收支調査を轉載して、此等部落の一般生活状態を窺ふよすがとする。

| 収入の部 | 以布利 | | 窪津 | |
|-------------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 百圓以上二百圓未満 | 二百圓以上三百圓未満 | 百圓以上二百圓未満 | 二百圓以上三百圓未満 |
| 百圓以上二百圓未満 | 一五 | 三三 | 四〇 | 一九 |
| 二百圓以上三百圓未満 | 四二 | 二二 | 二六 | 四〇 |
| 三百圓以上四百圓未満 | 二二 | 三〇 | 二九 | 三八 |
| 四百圓以上五百圓未満 | 三〇 | 四三 | 四三 | 四三 |
| 五百圓以上八百圓未満 | 九 | 八 | 八 | 九 |
| 八百圓以上千圓未満 | 四 | 七 | 一三 | 一三 |
| 千圓以上千五百圓未満 | 二 | 二 | 三 | 一 |
| 千五百圓以上二千圓未満 | 四 | 二 | 一 | 一 |
| 二千圓以上三千圓未満 | | | | |

支出の部

| | 以布利 | | 窪津 | |
|-----|-----------|------------|-----------|------------|
| | 百圓以上二百圓未満 | 二百圓以上三百圓未満 | 百圓以上二百圓未満 | 二百圓以上三百圓未満 |
| 以布利 | 四戸 | 二二戸 | 一戸 | 八戸 |

擬鯉釣の漁夫には多くは土地の者を乗り組ませる。然し一般に此の部落の漁夫は、沖漁に出るよりも定置漁業

に従事して、月々確實な賃銀を貰ふ方を好んで居り、従つて優秀な漁夫は主として定置漁業の方に集まるといふ。漁獲した鯉は共同販賣所で競賣される。

次に分配の方面を見よう。大體當皆制度であり、先づ燃料、食料、飼料等の消耗品、又船舶償却費等を水揚高から控除するのであるが、これが約五割を占めてゐる。残り五割の内一割三四分が船主へ、三割六・七分が乗組仲間の手へ夫々入る。船主と乗組仲間との分配の實際上の率は、以前と餘り相違がない様に思はれる。因に、昭和九年度に於ける總漁獲高は六、二七七圓、従つて一艘平均三千餘圓に過ぎないのである。

さて眼を轉じて商人が買った鯉の行方を見よう。近頃は生鮮のまま、他府縣へ送らるゝものもあるが尙大部分節に製造される。昭和九年度の製造價格五、三二二圓の内、原料費が四、〇八〇圓であるといふから、大體これが生鯉の代金であらう。上灘村には鯉節製造戸數が六戸、従業者數が四〇人であるといふ。我々が部落視察中三・四戸の釜納屋を見たが、恐らくは上灘村の鯉節製造は、窪津部落のみが鯉漁を營んでゐる關係から大體此の部落に集つてゐると思はれる。釜納屋の構造にも藁葺二階式の舊式のものもあつたし、又窯を煉瓦で築き乾燥場を別にした新式のものも寓目した。注意すべきは鯉節の釜納屋の存してゐる事である。統計上から見ると昭和九年度鯉漁獲高六、七七七圓の内、節の原料として五、五三八圓、その製造價格六、九四〇圓、製造戸數九、従業者數四五人とあるから、鯉節製造業より優勢さを示してゐる。以上の數字は勿論上灘村全體としてのものである。がそれにして原料費の低廉な鯉節製造業の優勢さの意味は、此の部落としては見逃し得ない様に思はれる。かくの如く此の部落に於ける鯉節製造業は竈數から云つても鯉節製造業との關係から見ても、よりも隆盛になつてゐるとは云ひ得ない様である。

尙最後に此の部落に於ける他の水産製造及び三四の小漁業について少し述べて置かう。鯉やシビ等をも節に製造する事がある。鯉を四つにおろし、一節を三つに切つて煮る。きつね色になる迄ざつと火を通し、籠又は石油

びつ等に入れて高知へ出す。これを焼上げといふ。又鹽にする場合もある。鱈を頭を落さず腸を出し、骨の兩片へ腹から庖丁を入れて鹽を容れる。シビの場合には二つにおろして主骨をとり、縦目に庖丁を入れて鹽を容れる。鹽は高知から買ふ。又氏の部落の鱈は前述の如く大部分節に製造されるが、今日では昔と違つて生鮮のまゝでも多少は諸方へ取引される。その方法は、大くの場合他府縣の魚商人が來航して、生鱈を箱詰にして持ち去るといふ。此の販路は主として阪神、高知、及び瀬戸内海方面である。尙進んで小漁業について見るに、磯立網はイセエビを捕るのに用ひられる。これは一反の長さ十尋、高さ四尺で綿糸九口を用ひ、製作費一反四圓位であるといふ。二反を片手と云つて使用上の單位とする。アワビ採りも昔は盛であつたが、眼鏡が出來てから濫獲され、今日では非常に減少してゐるといふ。これは生鮮のまゝ高知へ出す。海藻類ではフノリ、テングサ等がある。昔はアントクメが非常に豊富であつたが、今日ではさう多くは採れないらしい。採取方法は皆アマをして取つたが後にはジヨレンで引きかけて取つたといふ。テングサは以前は銘々にとつた物を賣つたが、此の頃ではまとめて商人に入札させるといふ。大阪邊の商人が買ひに來るのである。海藻をとるにはすつと以前には各自が銘々勝手にとつたが、後には一日とか十日とか、潮時を見合して口あけをなし、フノリとかテングサとか、とる物の時期をきめてとつたといふ。今日に於ては漁業法によつて採取の期間が定つてゐる。昔は海藻類には税はかゝらなかつたらしいといふ。磯ものは何れにしても築港をやつた爲、今日では減少して了つてゐるといふ話である。

要之に窪津の漁業は、以前に於ては夏期を中心としては鱈漁が主たるものであつた。冬期は浮津及津呂の捕鯨組が、隔年毎に此處の地先で捕鯨業を經營したが爲、村民自身はたいした漁業をもなし得ず、漁業部落の人々にあり乍ら鯨組の岡人夫として雇はれたのである。即ち此の部落は、冬期は鯨組の犠牲となつたかの感なしとしない。従つて漁業部落といふ見地から此處を見るならば、鱈漁業部落であつたといふべきであらう。

さて以前より鯨組の犠牲になつてゐたといふ事態は、やがて此の部落の漁民をして獨立自主の精神を長縮せし

め、他力本願的傾向をとらしめたかに見える。それと共に、元來此の部落が、全體として資本に恵まれなかつた事も考へねばならぬ。資本の不足と消極的態度、これが今日の窪津の漁業の上にも影響し、又強く現れてゐる。定置漁業の如き大規模のものを自力を以て經營し得ないといふ事は少時措くも、十噸内外の發動機船を共同にて經營し乍ら、然もその數僅に三隻に止まり、又漁夫も沖乗をするよりむしろ定置漁業に雇はれ、少ない乍ら確實な賃銀を貰ひ得る生活をなさんと心掛ける者が多いなど、恐らくその現れであらう。かくて此の部落に於ては、進んで積極的に、遠洋鱈漁業を企圖せんとする如きは目下の所望み得られぬ様である。従つて鱈漁業の現況の如きも、漸く昔の面影のみ残り、僅に餘喘を保つてゐるに過ぎないと云ふべきであらう。

註 (一)高知縣鱈漁業誌(高知縣鱈漁業同業會編) 一六頁尙窪津部落の漁業状態に關しては經濟更生計畫書昭和十年七月高知縣鱈多郡上灘村に負ふ所多し。

總括

長期にわたる特殊研究ではないから、纏つた結論を下す事は不可能である。此處には唯總括的に感想を述べて置かう。

鱈漁業を中心にして調査した三部落は、各部落とも夫々特殊な性質を示してゐる。室戸は、古來大規模なる捕鯨業が行はれ、漁業、商業(魚商)等各分業が早くより營まれて居り、又部落内に良港を擁して阪神に接近せる爲、五十集が古くより大消費地に交渉を有してゐた、のみならず鯨五十集に至つては番取りと稱して相互間に猛烈な競争をなしたのである。斯く地理的條件を背景として、經濟的競争の激しい傳統を有してゐた此の部落では明治時代に入つて自由なる制度の下に活躍すべき諸條件が與へられてからは、前時代からの氣運に拍車を加へ、更に進んでは、新なる技術と經營方法とを攝取して部落の經濟を一段と發展せしめたのも蓋し當然の事柄であら

う。かくて、此の數十年間に於ける鯉漁業部落としての室戸の推移は、進展しゆく我資本主義經濟の流れにやや順調に棹さしたかの如くである。

これに對し、中ノ濱部落は好箇の對象を與へてゐる様に思はれる。昔は豪家山城屋が、此の部落に於ける經濟的實權をほとんど掌握し、そこに中ノ濱が漁業部落としての特種な面目を顯示してゐた觀がある。然してその面目は、傳統的なる漁業經營や技術を守る所に存したるもの、如く、従つて部落民にはその範圍より外へ出る訓練は何等行はれてゐなかつた。然して動力漁船の利用に際會しては、先づ漁場と漁港との關係の下に漁業と製造業との分離を餘儀なくせられた。それと共に部落民が從來の技術をのみ固守し過ぎたるが故、遠洋漁業の經營が意の如く行はれず、又生鯉賣買の趨勢が高まるに従ひ、及び其他の原因によつて節製造業に於ても遂に昔日の面影を止めざるに至つた。勿論此の半面には、豪家山城屋一家の個人的運命を考へねばならぬ事は前に一言した如くである。我は豪家山城屋が辿つた過程を通して、今述べた如く、新時代に遭遇した舊時代の漁業組織が、その解體を餘儀なくせられてゆくといふ一面を看取し得ると思ふ。即ち山城屋のかゝる運命は、やがて昔鯉漁業の著名なる部落としての中ノ濱の辿つた運命であるとも云へよう。

轉じて窪津の鯉漁業を見るに至つては、その趣自ら異なるものがある。此の部落は舊捕鯨業の時代から他力的消極的氣風の強い所の如く思はれ、今尙、此部落内に生を享けて來た人々の氣質にその傳統が感ぜられる。明治三十八・九年舊捕鯨業の消滅に際し、緊禪一番遠洋漁業に乗り出さんとする積極的態度に出でず、却つて又定置漁業の裡に踞踏して了つてゐる。此の半面には此の部落が、邊陲の地に位して自然的にも恵まれず又全體として以前より經濟的餘裕が存するなきを認めねばならぬにしても、室戸の如き激烈なる經濟競争の試煉を経ざりし事をも考へねばならぬであらう。以上の如き諸原因によつて此處の鯉漁業には殆ど何等の發展も見得ず、唯舊來の面影のみ止めてゐるに過ぎざるを思はしめる。

【尙節製造業の盛衰に就ては他國のそれ（鹿兒島、靜岡、仙臺等の）の影響を考慮しなければならないが其等に關しては後の機會に觸れよう。】

アチツク ミューゼアム 刊行書目

((アチツク ミューゼアム彙報))

| | | | |
|-----|-------------------------------|-------------------|--|
| 1) | 早川孝太郎校註 愛知縣北設樂郡下津具村 村松家作物覺帳 | 定價 1.50 送料 .14 | |
| 2) | 竹内利美編著 小學生の上伊那川島村郷土誌 調べたる | 定價 1.80 送料 .10 | |
| 3) | 武藤鐵城著 羽後角館地方に於ける鳥蟲草木の民俗學的資料 | 定價 1.80 送料 .14 | |
| 4) | 吉田三郎著 男鹿寒風山麓農民手記 | 定價 1.50 送料 .10 | |
| 5) | 高橋文太郎著 武藏保谷村郷土資料 | 定價 2.50 送料 .14 | |
| 6) | 内田武志著 静岡縣方言誌 分布調査第一輯 動植物篇 | 定價 3.80 送料 .14 | |
| 7) | 竹内利美編著 小學生の上伊那川島村郷土誌 續篇 調べたる | 定價 2.80 送料 .14 | |
| 8) | 知里眞志保著 アイヌ民俗研究資料 第一 説話一 | 定價 .70 送料 .02 | |
| 9) | アチツク ミューゼアム著 所謂足半(あしなか)に就いて | 近刊 | |
| 10) | 稻塚和右衛門著 復刻木實方祕傳書 [雲瀟植樹植林製鐵手記] | 定價 1.70 送料 .14 | |
| 11) | 宮本常一著 周防大島を中心としたる 海の生活誌 | 定價 2.80 送料 .14 | |
| 12) | 山口和雄著 九十九里舊網漁業 | 近刊 | |
| 13) | 進藤松司著 廣島三津漁民生活手記 | 近刊 | |
| 14) | 内田武志著 静岡縣方言誌 分布調査第二輯 童幼語篇 | 近刊 | |
| 15) | アチツク ミューゼアム著 復刻狩獵古記録二篇 | 近刊 | |
| 16) | 吉田三郎著 男鹿寒風山麓農民日録 | 近刊 | |

發賣所

(本店・各支店・出張所)

丸善株式会社三田出張所

東京市芝区三田二丁目一番地
電話三田(各)一八九二六番
横谷口庫東京一八五二番

所 有 權

| | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 |
| 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 | 東京市芝区三田二丁目一番地 |

昭和十一年十一月二十五日印刷
昭和十一年十二月三十一日發行

土佐鯉漁業閉書
頒布價金五拾錢

本製島中

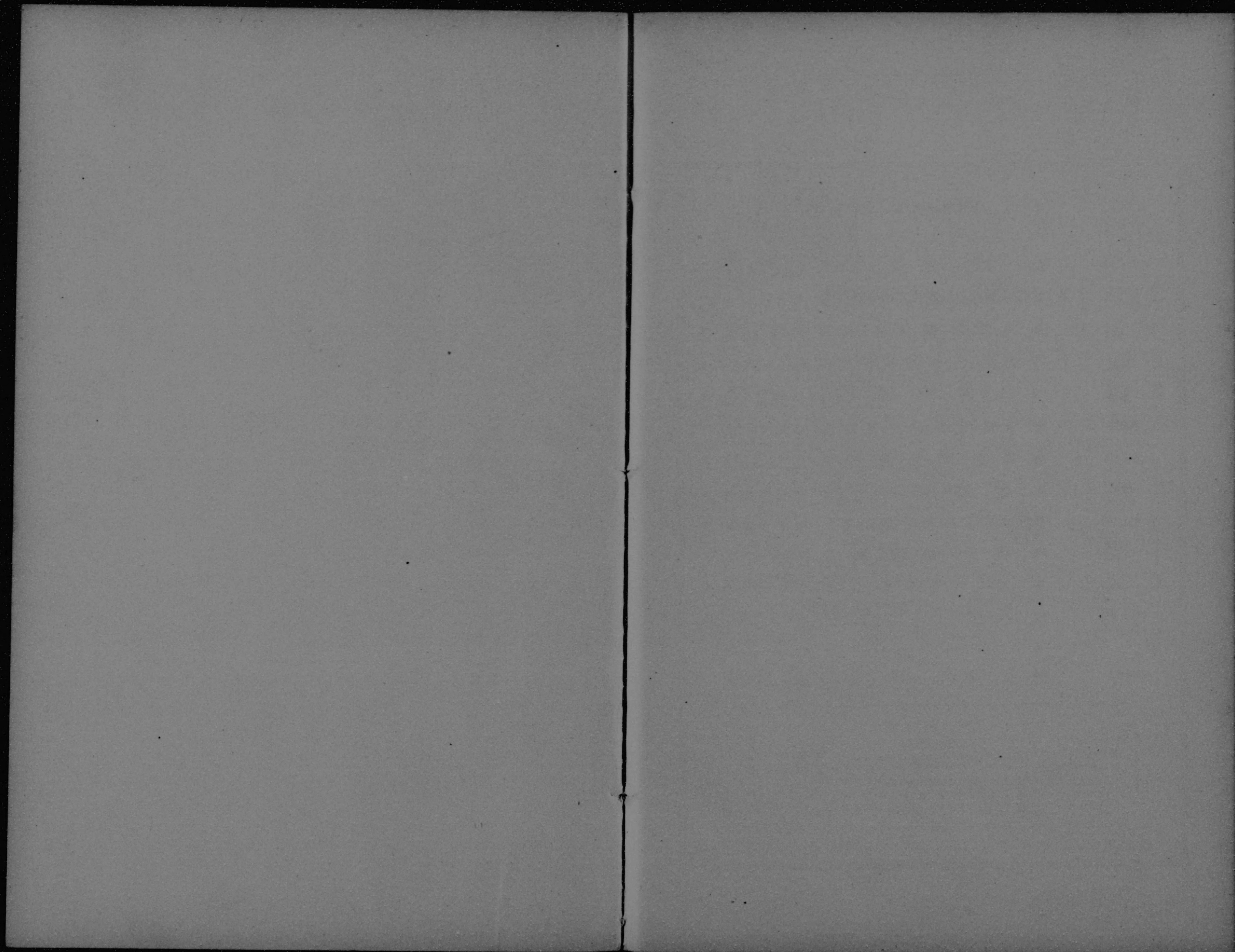
《アチツク ミューゼウム ノート》

- | | | | |
|-----|-------------------|----------------------------|--------------------------------|
| 1) | アチツク ミ ューゼウム編著 | 民具問答集 | 近刊 |
| 2) | 山口和雄著 | 明治前期を 中心とする内房北部の漁業と漁村経済 | 上下 二冊 定價各 .50 送料各 .02 |
| 3) | 櫻田勝徳共著 山口和雄 | 隠岐島前漁村探訪記 | 定價 1.50 送料 .02 |
| 4) | 櫻田勝徳著 | 隠岐島前 に於ける糸満漁夫の聞書 | 定價 .30 送料 .02 |
| 5) | 櫻田勝徳共著 山口和雄 | 伊豆三島 伊豆大島 漁村探訪記 | 定價 .30 送料 .02 |
| 6) | 岩倉市郎著 | 喜界島生活誌調査要目 | 非賣品 |
| 7) | アチツク ミ ューゼウム著 | 民具蒐集調査要目 | 非賣品 |
| 8) | 櫻田勝徳著 | 伊豆日報島 に於ける奮漁業聞書 | 定價 .50 送料 .02 |
| 9) | 櫻田勝徳著 | 土佐四萬十川の漁業と川舟 | 近刊 |
| 10) | 伊豆川浅吉著 | 土佐鯉漁業聞書 | 定價 .50 送料 .02 |
| 11) | 藤本真久慶著 | 新島探訪録 | 定價 .80 送料 .02 |
| 12) | 高橋文太郎著 | 秋田マタギ資料 | 近刊 |

アチツク ミ
ューゼウム編著 文 献 索 隠 見本呈上

費 賣 元

丸善株式会社三田出張所
 東京市芝区三田二丁目一番地
 振替口座東京11852番
 電話三田(45)1926・1927番



| |
|-----|
| 684 |
| 124 |

